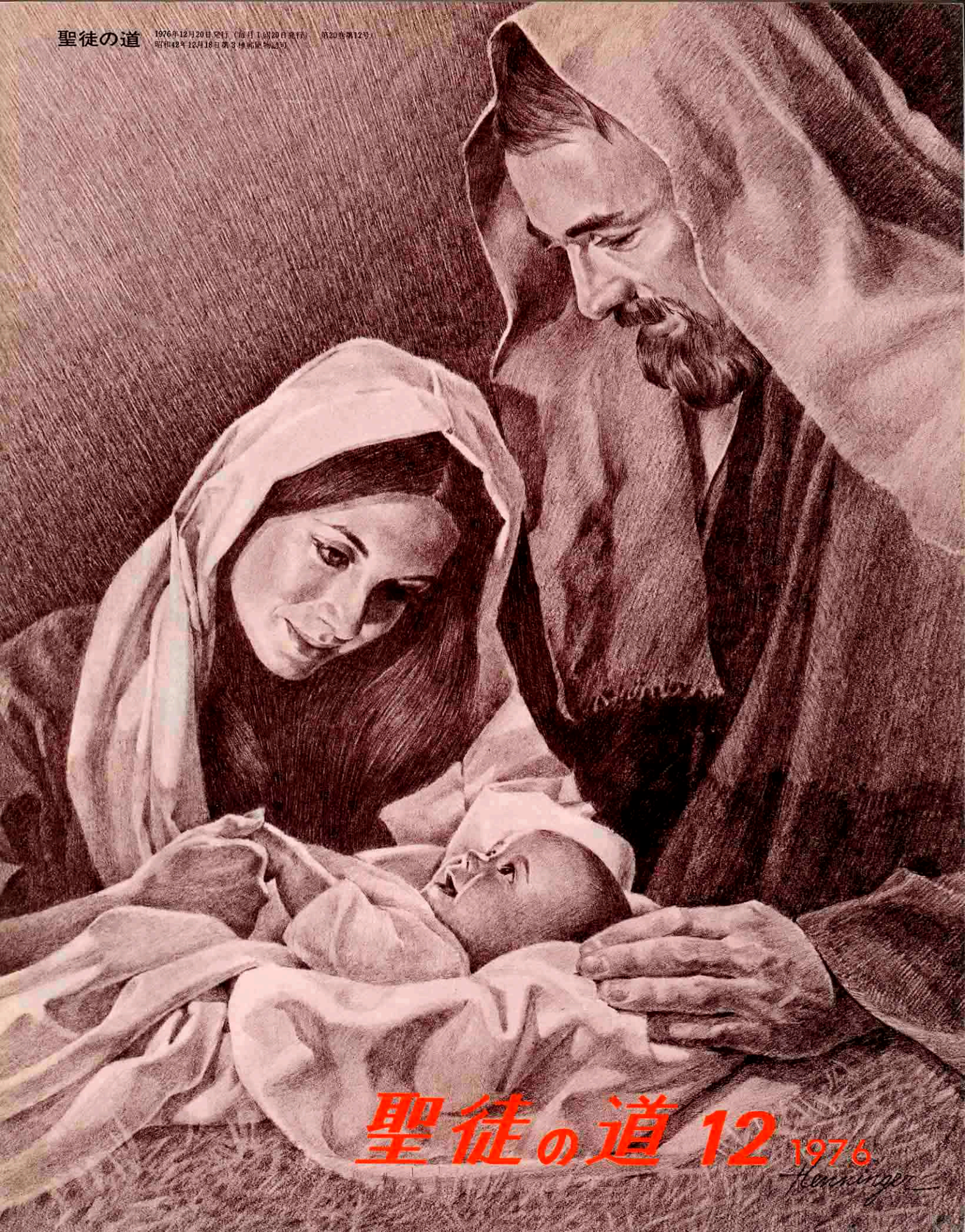




末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグラント・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
L・トム・ペリー
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
ギャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

1976年 12月号

も く じ

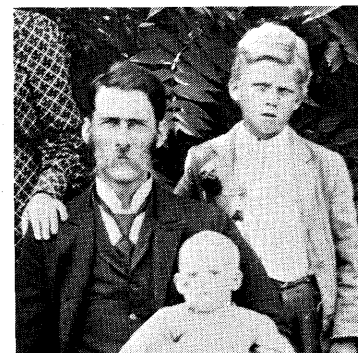
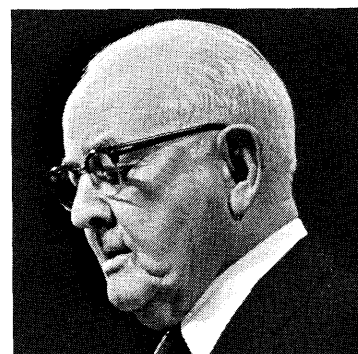
小さな奉仕の業	スペンサー・W・キンボール	541
大いなる喜びのおとずれ		542
キリストの象徴	ゴードン・B・ヒンクレー	543
日々の恵み		545
与えることのあと半分	ルネット・H・リード	548
予言者を知る人々		550
8さいのバプテスマ		553
すばらしいプレゼント	ドーリー・ヒルドレス	554
せかい中のおともだちへ		557
ひとたばのむぎ		558
おもちゃばこ		560
悦びは果していけばかりぞや	マリオ・G・エケベルリ	561
忠実な者となりなさい	レックス・D・ピネガー	562
宿屋騒動	ダイナ・ドナヒュー	565
質疑応答		566
家庭訪問教師の召しを楽しむ		
キンボール姉妹	ゲリー・アバント	568
家庭でも教会付属図書館を利用しましょう		569
ローカル・ニュース		570

聖徒の道 12月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布 5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京 0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



小さな奉仕の業

大管長 スペンサー・W・キンボール



実際に仕えることによってこそ仕える方法がわかるという
ことを、私は経験から学んだ。私たちは同胞のために働くとき、そのことで同胞を助けることができるばかりでなく、自分自身の問題をも新しい観点から眺めることができるのである。私たちは他人のことにもっと関心を向けるようにすれば、自分自身のことで思いわずらう時間は少なくなる。奉仕の中にこそ主の約束があり、自分の命を失う者は、それを得るのである。(マタイ10:39参照)

このように私たちは、奉仕を通して、人生における指針を見つけるという意味で自分自身を「得る」が、そればかりでなく、適切な方法で同胞に仕える度合を深めると、それに応じて心に充実感を覚えるのである。そして人々に仕えるときに、さらに意義ある存在者となる。

ジョージ・マクドナルドは、「人と親しく心を通わせるようになるのは、愛されることによるのではなく、愛することによる」と言った。だれしもが愛されなければならないのは当然だが、しかし、健全な人生としっかりした目的意識を持ちたいと思ったら、いつも受けるだけではなく、与えていなければならない。

私たちは、奉仕しようとする相手の人に、神がその人を

愛しておられ、その人のことを心にかけ、その必要を心に留めておられることを悟らせる必要がある。アロン神権の年齢の若きジョセフ・スミスに、全人類に対する教えを託そうと現われたもうた父なる神と御子イエス・キリストは、この地球上のだれかにただ当て推量で姿を現わされたのではなかった。主は、周到に計画されたその出来事を、「主なるわれ、この世に住める人々に襲い来るべき禍を知れば、わが僕ジョセフ・スミス(二代目)を呼び天より語りて彼に誠命を下せり」(教義と聖約1:17)と言っておられる。

神は何事をも、その場その場の思いつきではなく、常に愛の深い父として、目的をもって行なわれる。その目的は私たちの知るところであり、私たちもまた人生に目的を持っている。

神は私たちが心に掛け、私たちを見守っておられる。しかし、神が私たちの必要に応えられるのは、普通の場合、人を通してである。それだからこそ、私たちが神の王国で互いに奉仕しあうことが大切なのである。教会員は、主の弟子の全国土が他国の領土にとり囲まれている飛び領土とも言うべき信者の社会の中で、お互いの力と支えと指導を必要としている。教義と聖約には、「弱きを助け、垂れたる腕を挙げ、かよわきひざを強く」(教義と聖約81:5)することがいかに大切であるかが記されている。奉仕の行為が、ささやかな励ましやごく日常的な仕事の地味な助けであることは多い。だが、日常的な行為や、小さなしかし思いのこもった行ないから、何と素晴らしい結果が生まれることか。

世の道と神の道の対照がますますきわだつ状況にあって、教会員の信仰は、前にもまして厳しく試みられるであろう。私たちにできる最も大切なことのひとつは、奉仕することによって自分の証を示すことである。その奉仕は、霊的成長を生み、さらに奉仕の気持を確固たるものとし、戒めを守る能力を高めてくれる。

25年ほど前に、スティーブン・L・リチャーズ副管長は私たちに奮起させる言葉を語った。

「平凡でありきたりな事柄ではあるが、私は、人生で最も劇的で取り組みがいのある大切なことは、この『戒めを守る』ということだと、長い間考えてきた。これによって、自分の存在のすべてが試される。それは同時に英知や知識、性格、そして知恵の表明である」

霊性には大きな安全が伴う。そして、その霊性は、奉仕なくしては得られないものである。

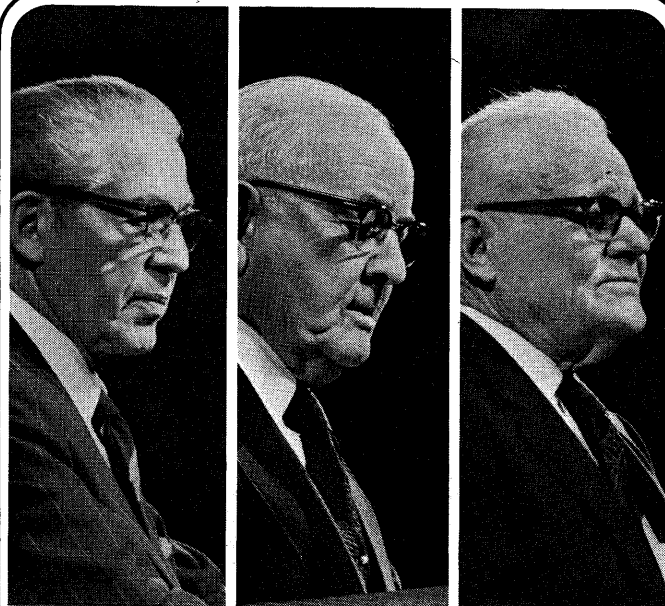
しかしながら、戒めを守っている人に奉仕するための励みとして必要なことは、新たに靈感や啓示を受けることではなく、むしろすでに知っている事柄をみたまによって呼び覚ますという簡単なことである場合が多い。聖霊は私たちの理解と同様、記憶をも刺激する。従って私たちは、すでに正しいと知っていることは行なわなければならない。

簡単なこと、わかりやすいこと、具体的なことを私たち末日聖徒がふさわしく生活をして聖霊の感化を受け、常に聖霊を伴侶として導きを得なければならない理由は、ひとつにはそのためである。技術の体得は確かに役立つが、聖霊の導きは、それよりもはるかに大切である。

私たちが良い指導者となるためには、自分を助け、導き教えてくれた人々の持つ特質を折に触れて思い出すことである。自分の人生に最も感化を与えた人を2、3人選ぶでしょう。重大な出来事に直面したとき、また苦しいときに具体的にその人たちのどんな援助がありがたかったであろうか。



しばし考えてみれば、その人は真心からあなたのことを心配し、あなたのために時間を取り、あなたにとって必要なことを教えてくれたことがわかるであろう。今、自分の召しにあってそれと同じ根本的な特質を表わしているかどうか、自分を振り返ってみていただきたい。技術が優れていて特別に大きな影響を受けたからその人のことがいつまでも忘れられない、ということは少ないであろう。多くの場合、自分を愛し、理解してくれた、あるいは時間をとって自分を助けてくれた、または自ら模範となって道を示してくれたという人が、心に思い出されるものである。それだからこそ、昔私たちが頼りにした人たちと同じことを、今私たちが頼りにしている人々のために行なうことの大切さは、いくら強調しても足りないほどである。



大いなる喜びのおとずれ

地上において共に神の王国の建設に力を尽くしておられる愛する同胞の皆様、そして世のすべての人々へ

ベツレヘムで羊飼たちが天使から得た大きな喜びを、このクリスマスの季節に味わうことができますように。そしてそれが、永遠に続きますように。

復活の真実性を知り、永遠の生命を得る喜びを、平和の君を通して得ることができますように。

そしてとりわけ、主の戒めを守ることににより、家族ともども祝福と絶えることのない幸福を得ることができますように。キリストがこの地上に授けたもうた賜は、まさに「喜び」の贈物だからです。

大管長会 スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

Spencer W. Kimball
N. Eldon Tanner
M. G. Romney

キリストの象徴

十二使徒評議員会会員

ゴードン・B・ヒンクレー

この教会の生けるキリストの象徴は、十字架ではなく、私たちの信仰に満ちた生活である。

1975年の3月に、私たちはアリゾナ神殿を一般公開した。神殿の改装が完成した後、25万ほどの人々が見学に訪れた。一般公開の初日には、他の宗派の牧師たちを来賓として招待したが、数百人の牧師がこの招待に応じた。私は恵まれて彼らに話をし、また見学の最後に彼らの質問に答える特権が与えられた。私は彼らに、どのような類の質問が出ようとも喜んで答える旨を告げた。数多くの質問が出された。その中には、あるプロテスタントの牧師から出された次のような質問があった。

「私はこの建物の中をすみからすみまで見せていただきました。この神殿の正面には、イエス・キリストの名が掲げられています。しかし、どこを捜しても、キリスト教の象徴である十字架を表わすようなものは、全く見当りませんでした。他にもあなた方の教会の建物を見ましたが、やはり十字架はありませんでした。イエス・キリストを信ずると言っておられるのに、これはどうしてですか。」

私はこう答えた。「私は、同じキリスト教徒である皆様の感情を害しようなどという気は毛頭ありませんが、皆様は、聖堂の尖塔や礼拝堂の祭壇に十字架を使い、また、祭服には十字架を縫いつけ、更に出版物にも十字架の印を押していらっしゃる。しかしながら、私たちにとっては、十字架は死んでいくキリストの象徴なのであって、私たちが伝えているのは、生けるキリストのみ言葉なのです。」

すると、彼は次のように尋ねた。「では、十字架を使わないのなら、あなた方の宗教の象徴は何ですか。」

私は、教会員の生活こそが私たちの信仰の何であるかを表現する上で、ただひとつ意味のあるものとなっていなければ

ならない、と答えた。事実、教会員の生活こそが私たちの礼拝の象徴なのである。

私は、この答えを聞いた彼が、私に対して、ひとりよがりだとか、独善的だなどという気持ちを抱くことのないよう切に望んでいる。彼の観察は間違っていない。私たちは、確かに十字架を使っている。ただし、教会の従軍牧師だけは、身分証明のために十字架を軍服に縫い込んである。一見したところ、教会のとっている立場は、私たちの信仰宣言とは矛盾しているように思えるかも知れない。イエス・キリストは私たちの信仰の中心人物であると宣言しているからである。しかしながら、教会の正式名称は、末日聖徒イエス・キリスト教会である。また、イエスを主なる救い主として礼拝している。聖書は教会の聖典である。また私たちは、メシヤの降臨を予言した旧約の予言者たちは神からの靈感を受けて語ったと信じている。私たちはまた、マタイ、マルコ、ルカ、そしてヨハネの記録を誇りとしている。天父の肉における独り子である神の御子の誕生、教えと導き、死そして復活について明らかにしてくれている記録だからである。古代のパウロと同様、私たちも、「(イエス・キリストの)福音を恥としない。それは、……救を得させる神の力である。」(ローマ1:16)そして、ペテロと同様、私たちも、「わたしたちを救い上げる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていない」(使徒4:12参照)という名こそ、イエス・キリストのみ名であると断言してはばからない。

次にモルモン経について述べよう。私たちはこの書物を、新世界の聖書であると考えている。この書物は、昔西半球に住んでいた予言者たちの教えを記したものであり、さらにまた、ユダヤのベツレヘムで生まれ、カルバリの丘で亡くなられた御方について証するものである。絶えずその信仰を動揺させている世の人々に申し上げる。この書物は、主イエスが神の御子であることを宣言する、第2の力強い証である。この經典の前身は、15世紀も昔、このアメリカ大陸に足跡を残したひとりの予言者の手になるものであるが、そこには、この書物が書かれた目的が、次のように明快に述べられている。「ユダヤ人と異邦人とにイエスは永遠の神なるキリストにましまして、万国の民に現われたもうことを確信させるためである。」

また、近代の啓示を集めた「教義と聖約」という書物の中でも、主は御自身について、次のように明確な言葉で宣言しておられる。「われはアルパにしてオメガなり。主なるキリストなり。すなわちわれは始めにして終りなり。世の贖い主

なり。」(教義と聖約19:1)

このような宣言について考え、また証をも考慮してみると、アリゾナでの友人の牧師が尋ねたように、イエス・キリストを信じると公言しながら、なぜその死の象徴であるカルバリの十字架を使わないのかと多くの人々が尋ねるのも至極もっともなことであると思われる。

そのような疑問に対して、まず答えておかなければならないことがある。それは、この教会の会員である限り、全人類に生命を与えるために自らの生命をささげて下さった贖い主のあの痛苦の贖いを、だれひとり忘れてはならないということである。ゲッセマネの園における苦悩、法廷でのひどいあざけり、肉体にくだむ背徳のいばらの冠、ピラトの前で大声を挙げる血に飢えた暴徒の叫び、ただひとりカルバリへと歩む重苦しい足取り、大きくぎが手足を刺し貫くときの恐ろしい苦痛、あの悲劇の日に十字架上で受けた苦痛に次ぐ苦痛、そして「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23:34)と叫ぶ神の御子、私たちはこれをどれひとつとして忘れてはならないのである。

これが十字架であった。責苦の器具であり、平和の君を滅ぼすために考案された恐ろしい道具であった。そして、病人をいやし、盲人に光を与え、死者を生き返らせるという奇跡の業に対する悪人たちの返報だったのである。このような十字架に主がかけられ、そして死なれたのである。ゴルゴタの丘の寂寞たる頂での出来事であった。

私たちはこれを忘れることができない。いや、決して忘れてはならない。それは、この丘の頂で、私たちの救い主にして贖い主なる神の御子が、私たち一人一人のために身代りの犠牲となってその生命をささげて下さったからである。だが、ユダヤの安息日の前の晩、主の命なき肉体が降ろされ、借りたばかりの墓地に急いで横たえられたとき、重苦しい沈痛な闇の中で、主の最も熱心な、また最もよく知りつくしているはずの弟子たちさえも、その希望の火を徐々に消していったのであった。彼らは、かつて主から告げられたことを悟ることなく、希望を失っていた。彼らの信じていたメシヤは死んでしまった。彼らの熱意と信仰と希望のよりどころであった主は、幕のかなたへ行ってしまった。永遠の生命について語っていた主が、そしてラザロを墓から生き返らせたあの主が、それまでの人となんら変わることなく、やはり死んでしまった。主の悲しみに満ちた短い生涯は、閉じられたのである。その生涯は、はるか昔に、イザヤが予言した通りであった。

主は「侮られて人に捨てられ、悲しみの人々で、病を知っていた。

……彼はわれわれのたがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ。彼はみずから懲らしめをうけて、われわれに平安を与え……たのだ。」（欽定訳イザヤ53：3、5）その主が、亡くなってしまったのである。

私たちは、主を愛していた人々の胸の内を推測することしかできないが、彼らは、ユダヤの安息日、すなわち今で言う土曜日に、長時間にわたって、主の死について深い思いを巡らせたことであろう。

そして、週の第1日目の夜が明けた。私たちの言う主の安息日である。悲しみに沈んで主の墓にやって来た人々に、い合わせたま使は、声高らかに宣言した。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。

もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。」（マタイ28：6）

こうして、人類の歴史上、最大の奇跡が起こった。かつて主は御自身のことを「わたしはよみがえりであり、命である」（ヨハネ11：25）と言われた。だが、弟子たちはそれを理解してはいなかった。しかしこのとき、彼らは確かに知った。主は悲しみと苦痛と孤独のうちに亡くなられたが、今、権威と美と生命とをもってよみがえり、眠りについていた人々の最初の実となられた。そして、あらゆる時代の人々にとって、確かな証となったのである。「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」（1コリント15：22）

カルバリの丘では、死にゆくイエスであった。そして墓からは、生けるキリストとして現われたもうた。十字架は、ユダの裏切りの悲しい実であった。ペテロの打ち消しの仕上がりでもあった。だが、それに対して、だれもない墓は、主の神聖さの証、すなわち永遠の生命の確証となった。そして、まだ答えられずにいたヨブの疑問に対する答えとなったのである。「人がもし死ねば、また生きるでしょうか。」（ヨブ14：14）

ただ死んだだけなら、イエスという名は忘れ去られたことであろう。あるいは、せいぜい歴史書の片すみで、数多くいた偉大な教師のひとりとして、その生涯が簡単に紹介されて、その名を留めたにすぎないであろう。だが、ひとたびよみがえられたイエスは、生命の主となられた。こうして、主の弟子たちは、確固たる信仰をもってイザヤの言葉に唱和することができたのである。「その名は、『靈妙なる議士、大能の神、とこしえの父、平和の君』ととなえられる。」（イザヤ9：6）

ヨブの願いを込めた言葉が、今や現実のものとなった。「わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、末の日に彼は必ず地の上に立たれる。

わたしの皮のうじがこの体を減ばしたのち、わたしは肉に在りて神を見るであろう。

しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこられる。」（欽定訳ヨブ19：25-27）

マリヤが、よみがえられた主に最初に会ったときに言った「ラボニ」（ヨハネ20：16）の叫びは至言であった。それは、真の意味で、主が主となられたからであり、また、生命の主となられたばかりか、死自体をも克服した主となられたからである。死の縄目は解かれ、死の勝利も打ち砕かれたのである。

人を恐れたペテロも変わった。あの疑い深いトマスでさえ、確固たる尊崇の念を持って、心の底から「わが主よ、わが神よ」（ヨハネ20：28）と叫んだ。この劇的な場面で主の言われた言葉は「信じない者にならないで、信じる者になりなさい」（ヨハネ20：27）という、忘れることのできない言葉であった。

それに引き続いて、主は数多くの人々に現われた。あるときには、パウロの記録によれば、「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた。」（1コリント15：6）

そして、この西半球には、主がかつて言われた、他の羊たちが住んでいた。この民は、「天から出てくるような声が聞えた……。その声は、『わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け』とかれらに仰せになっていた。

群衆は……天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白い衣を召して、降ってきて群衆の中に立ちました。……

時にそのお方は手を伸べて群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。……

起ちてわれに近づけ。』（Ⅲニューフェイス11：3、6、8-10、14）

これに続いて、この美しい記録には、復活された主が古代アメリカ大陸の人々に施した教えと導きの言葉が、数多く書かれている。

そして最後に、現代の証人たちがいる。主がこの神権時代、予言されていたこの時満ちたる神権時代を開くために、再び来臨されたからである。栄光に満ちた示現の中で、復活された生ける主と、天の神であるその御父とが、少年予言者の前に姿を現わし、古代に与えられていた

真理を回復する業を新たに始められたのである。これに続いて「多くの証人が雲のように」（ヘブル12：1）頻出した。そして、最初の示現を受け入れた現代の予言者ジョセフ・スミスは、確固たる言葉で、次のように宣言した。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』ことなり。

われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生きたもう独子なりと証したもう声を聞けり。

すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」（教義と聖約76：22-24）

これに加えて、聖きみたまの力によって、主の実に生きたもうことを厳肅に証した証人が、そして現に証する証人が、何百万といる。そうした証は、人々の慰めであり、人々の力である。

そしてそれゆえに、すなわち私たちの救い主が生きておられるがゆえに、私たちは、その信仰の象徴として、主の死の象徴を使うことがないのである。いかなる印であろうとも、いかなる芸術品であろうとも、そしていかなる形であろうとも、生けるキリストの栄光と奇跡とを表現するのにふさわしいものはない。主は私たちに、何が主の信仰の象徴となるべきかということについて、次のように教えられた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」（ヨハネ14：15）

私たちは、主に従う者として、万一下劣で、悪から、好ましくないようなことをすることがあれば、そのときには、必ず主のみ姿を汚しているのである。反対に、もし善良で、慈悲深く、また高潔な行ないをしていれば、主の象徴をもっと輝かすことができる。私たちは、その主のみ名をこの身に受けているからである。それゆえ、私たちは生活を意義深いものとしなければならない。それこそ、生ける神の永遠の御子である生けるキリストについて証する、その証の宣言の象徴だからである。

兄弟姉妹たち、これは、それほど単純で、そしてそれほど深遠なことなのである。決して忘れることのないようにしようではないか。

日々の恵み

福音に従い、主を愛する日々の経験は、一つ一つ末日聖徒の胸に刻まれています。それはだれもが持っている物語です。証を強くした経験、祈りが答えられたこと、神権の祝福、愛する家族や友人の受けた靈感、教会の補助組織で

働く恵みなど、その経験を他の教会員と分かち合いましょう。

宛先：〒106 東京都港区南麻布5-10-25 中正堂会館

末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部

日本語コーディネーター

クリスマス・イブのバプテスマ

スティーブン・レイ・アフレック

私は同僚と二人で「転入者」プログラムというのを始めました。地域内に引越してきたばかりの人を訪問し、歓迎し、できれば教会のことを幾らかでも紹介しようという計画です。私たちはこの計画で、イギリスからやってきた奥さんのご家族と知り合いになりました。当時ご主人はベトナムに行っていました。奥さんは教会の勉強に非常に興味を持ちました。しかしそれはあくまでも教育的見地からのことでした。私たちは5週ほど教会の話をしたが、彼女はそれがすむと4人の子供をぜひ教会に入れたいと思うようになりました。でもそのためにはご主人の許可が必要でした。

クリスマスも間近いある日、彼女は私にこう言いました。「アフレック長老、一番のクリスマスプレゼントはバプテスマを受けて教会に入って、聖霊の賜を受けることですわ。家族にバプテスマを施して下さいませんか」その日は12月22日でした。彼女はベトナムにいるご主人に教会のことを手紙で知らせ、バプテスマの許しを求めました。

翌朝の1時に、私たちは彼女から電話を受けました。待

ちきれなくて電話をかけてきたのです。同じ22日の午後に届いた夫からの手紙にこう書いてあったということでした。「レスリー、僕は本当に素晴らしいものを見つけたよ。僕にとってはこの人生で何にもまさるものだ。小隊にモルモンの青年がひとりいて、サイゴンで開かれた集會に僕を連れて行ってくれた。僕はモルモン教会に入ったよ。」そして、長老たちに会うにはどうすればよいかが、詳しく書いてありました。

この家族は何という素晴らしい祝福を受けたことでしょう。彼女はクリスマス・イブにバプテスマを受けました。

今こうして当時の日記を読むと、そのクリスマスに無性に家が恋しくなったことや、でもそのバプテスマがあり、主のみたまに満たされて心から感謝したことが思い出されます。

(スティーブン・レイ・アフレック兄弟は五大湖伝道部で伝道。カレン・ロクヘッド嬢と結婚し、現在3児の父としてデンバーに在住。)

美しい銀の星

アイバン・T・アンダーソン

連合軍がドイツに大進撃をしたとき、私たち憲兵隊の責任は捕虜を前線から応急普請の営倉まで連れて行くことだった。

1944年12月24日は私は決して忘れない。その日の出来事が、ドイツ人の一捕虜の姿と共に今でもまぶたに焼きつい

ている。

ひどく寒い晩だった。私は1,200人以上の捕虜の監視にあたっていた。

私たちの状態は、ホームシックなどというそんななまやさしいものではなかった。クリスマス・イブだということ

が沈滞ムードに拍車をかけていた。

隊の中でテネシー州のスモーキー山脈出身の男が、はあはあと息を吹きかけて手を暖めていたが、それをやめて言った。

「なんて寒いあわれなクリスマスだ！ ここに足止めだからって、何もできないわけじゃないぜ。ひとつ走り行って木を見つけてくるからな」

「よしなよ」 もうひとりの同僚が叫んだ。「ここいらに木なんてあるわけないよ。どっちみち飾る物もないぜ」

スモーキー出身はそれに耳も貸さず暗闇の中に消えて行った。そして間もなく泥だらけの木を持って帰ってきた。

例のやじ馬がまた言った。「それが木だって言うのか。テキサスではなあ、やぶの下掘って出てくるやつだぞ」

スモーキー出身は楽しそうに見つけてきた木にガムの包み紙やあめの紙などで作った飾りをつけ始めた。

直接営倉の監視にあたっていない者たちが数人、この熱心な仲間の途方もない大仕事を手伝い始めた。

そうしていると、突然営倉の中から呼ぶ声が聞こえた。「アメリカさん、アメリカさん」

営倉の方を振り返って見ると、ひとりのドイツ人捕虜が片手を有刺鉄線の外に突き出しているのが見えた。もう一方の手で私に合図していた。

私は素早くライフルの安全装置を外すと、用心しながら彼に近づいた。彼の手のひらにあるものを見て、私は驚いた。

その捕虜はガムのすず箔で美しい銀の星を作り上げていた。それはまさに芸術品だった。彼はその星を私の手のひらに乗せ、飾りつけをしている木のてっぺんを指さした。

英語を少しでも話せるようにと期待しつつ、私は「こんなに精巧に、君は専門家かい？」と聞いた。

彼の当惑した表情から察して、私がドイツ語を話せないのと同じ位に英語がだめなことは明らかだった。私は彼の作品を手にして引き返すと、木のてっぺんに飾った。

するとあのやじ馬がまた口をはさんだ。「おーい、おれはいやだぜ、そいつは。しかしあのしろものが何だか本物の木に見えてきたな。へい、スモーキー、つべこべうるさって思ってるんだろう。そうだろう」(全員から同意のかさいがあがった。)

ツリーができあがると、私たちはクリスマス・キャロルを歌い始めた。すると、捕虜の数人が「聖しこの夜」を一緒に口ずさんでいるのに気がついた。

最後の曲が夜の闇に吸い込まれるように消えていくと、またあの呼び声が聞こえた。「アメリカさん」

彼は今度は両手を有刺鉄線の前に突き出していた。またライフルを用意し、注意しながら近づくと、またも両手にのっていたものを見て驚いた。

そのドイツ人芸術家は、手のこんだヨセフとマリヤと赤子のキリストの人形を作っていた。彼はその繊細な作品を私に渡ししながら、ツリーを指さした。

私はありがたいとうなずいて、精巧に作られた人形を彼の言った場所に注意深く取りつけた。

棒きれを軸に、すず箔を見事に巻いて作った赤子キリストの小さな人形は、そこに取りつけるとたき火の光を受けて、まるで天上の輝きのように光り輝いた。自分たちはイエスの教えから何と遠いことかと、流れる涙が痛いように感じられた。

営倉を見るとあの捕虜がまた鉄線のところにいたので、私は急いで戻って、ほほえみ、万感をこめて彼の手を握った。

彼は私にほほえみを返したが、たき火の光に彼の目の涙が光っていた。

第2次世界大戦が終わってからも、私は何度もこのドイツ人捕虜のことを思い出した。

私たちの出会いはつかの間だった。私たちはその夜のうちに2隻の船に乗り込んだ。しかしあの人は、恒久平和を託す唯一の望みが、12月の厳寒の夜に作りあげたあの美しい人形キリストの教えに立ち返ることだということを、きっともっともだといって賛成してくれるに違いない。ひとつ確かなことがある。それは主を愛する人は、全人類にも心から関心を持つということである。このふたつは同じことなのである。

(アイバン・T・アンダーソンはユタ州ヒル空軍基地に勤務し、現在このドイツ人捕虜の消息を尋ねている。記事の寄稿は夫人のジェディー・ジェイコブ・アンダーソン、英語およびスピーチ教師。2児がある。)

☆

☆

「木馬が置かれていた」

デレク・ディクソン

家の中は全く静かだった。妻と十代の3人の娘たちは、歳末バーゲンの初日なので服を買いに出かけていた。私は肘掛け椅子に深々と腰をおろし、ひざに読みもしない本をのせたまま、半日前に木馬の置かれていた、今はもう雪の積もっている芝生を眺めていた。私はクリスマス前のこの10日間の出来事を思い出していた。何げない家庭の夕べの決定が、無情に思えた町の大勢の人たちの心を開いたのである。

その夜、私たちは歌い、祈り、そしてウェンディーが12歳の知恵を働かせ、こう言ったのだった。「本当のクリスマスみたいじゃないわ、ねえ？ 家中浮き浮き、暖かくておしゃべりがにぎやかでそりゃいいけど、でも、本当のクリスマスっていう感じが、私しないの。」ほかのみんなが同調して、クリスマスの本来の姿がはっきりしてきた。私たちの最近のクリスマスは、たっぷり食べて十分にテレビを見て、つまらないことでよく口げんかをして、夜ふかしと朝寝坊が続いて、自己中心すぎて、よくないクリスマスだった。

今年のクリスマスもそれと同じ、家族の行事としては実りのない、霊的なものに欠けたものに終りそうだった。その日が過ぎると、またあのひどくうつろでそっけない気持ちを味わうのだろう。わが家の年中行事のあり方を変える道はないものだろうか。クリスマスの本当の精神を取り戻す方法はないものだろうか。

会議に少しの沈黙があってから、妻が話し始めた。週に数時間物理療法をしている学校に通ってくる精神障害児のまだ若い両親たちの話である。感情を表わさないこと、子供のことに無頓着な親がいること、貧困家庭が多いこと、恐らくものをこわすしか能がないために人から目もかけられない子がいること、人のために何かをするということが全くないこと。

妻は、家族全員で学校のその子供たちのためにおもちゃを集めるように提案した。この提案は異議なく了承された。

翌日、私たちは計画を実行に移した。友人たちに学校の子供たちのことを説明し、小さくてもいいから何かプレゼントを寄付してくれるようお願いした。

ところが、冷淡に見返されたり、あいまいな返事が返ってくるだけで、それきりだった。最近引越してきたばかり

の私たちは、物質第一の冷たい人たちが多いなじめない町だという評判も大して気にしなかったのだが、どうやらその通り、それもあり進行している感じだった。

私たちは寄付がないのがっかりした。しかしせめて自分たちだけでもプレゼントを作ろうと決め、翌日から何日か、夕食が終わると、合板と板紙で小さな人形のベッド作りに取りかかり、鮮やかな色のつや出しペンキを塗った。妻は小さなマットレスとカバーを作った。台所はまるでガリバー旅行記の小人の国の補給基地さながらだった。全部で6つのベッドができあがった。

そのときも、まだだれからも寄付が来なかった。私たちも頼まなかった。クリスマスはあと6日後に迫っていた。

ところがあと5日でクリスマスという日、裏庭の芝生の上に、霜をつけて太陽にちらちら光る木馬が置かれていた。たてがみは古びてもしゃんと雄々しく、目はりんりと輝き、耳は大将の怒号と雄叫びをしっかりとらえていた。木馬の隣には石けんのダンボール箱が置いてあり、中には品分けしたおもちゃがいっぱい詰まっていた。だれがどのようにしてそこに置いたか、今も謎である。しかしそれを合図のようにして、ちょうどその日から人々が学校の薄幸な子供たちへのプレゼントを持って玄関を訪れ始めた。

私たちの家からかなり離れた所に住んでいる独身のある男性が、寄付を頼んだこともないのに、やってきて妻にこう言った。

「どうですか。大したものじゃないけれど、マッチ箱に入ったミニカー、スタンドからもらったんだけど、6ガロンガソリンを買うたびにひとつずつもらえるんで、まとめて20個もらってきたんです。人からものを頼まれるような柄じゃないから、せめてできることをさせていただこうと思って。あすの晩持ってきますから、サンタクロースになって持ってってあげて下さい。」

彼はそう言って、照れを隠すようにくると背を向けて帰って行ったが、翌日の夜、20個のミニカーを持って玄関の石段に立った。

また、さらに驚くことが私の会社であった。ロンドンの荒っぽい東部育ちで偏見の強い気短かな青年がいて、自分の信仰を守ろうとする私の努力などはまるで手の前で舞う旗のような感がしていたが、その彼が、その日私のところ

にやってきて言った。

「あんたとおれは友だちでもなんでもないし、実際あんたが両足折っていたって、通りを渡してやろうなんてつもりもないが、学校の子供たちとなりゃ話は別さ。目をつぶりゃ子供たちの顔がちらつくぜ。ジニーとおれで話をしてな。どうするかって相談して、できるだけのことをしようと決めたんだ。それで暇なときに飛行機を組立てて色塗って、家の天井からぶらさげて、ときどき眺めては悦に入ってたんだが、そいつもそれだけよ。それで、その飛行機くれてやろうと考えてな。しかし、子供ら遊んで壊しちゃったらどうする。まっ、そんな子が1時間でも遊べれば、プラモデルのひとつやふたつ惜しくはないさ」

そしてその日の午後、彼はえり抜きのプラモデルの飛行機をかかえてやってきた。

その晩帰宅すると、妻や子供たちが同じような経験を話してくれた。恥ずかしそうな見知らぬ人の話、仲良くなかった人が親切だった話、友だちの話など。みんな、恵まれない子供たちの姿を打ち消すことができなかったのである。こうしてわが家の居間はプレゼントであふれた。

次の日、学校のトラックが家に来て、プレゼントを積み、校長宅に向かった。そして子供たちに渡された。それきりである。

プレゼントを寄付した人たちは、だれも感謝やお礼を求めなかった。学校では校長がプレゼントの主を知っているだけだった。ほかにだれもその話をしなかった。

しかし、こうしてクリスマスが過ぎて、夕暮れの中になつていると、わが家に満ちたあの精神が寄付してくれた人たちの家にもあったに違いないと思う。私たちは家族として、人への奉仕の中にクリスマスの本当の精神があることを再び知った。家庭には快い安らぎがただよっていた。

冬の日がはや暮れ始め、冷たい星が下界を見下し、芝生をおおった雪が窓からもれる明かりを照らしてきらきらと輝くを見て、私はこの地球にいる人類に思いをはせる。あのクリスマスの小さな奇跡から、人の行動とそれぞれがあまたの人類に届くことを私は知った。車輪がまわり、歯車がかみあい、永遠の輪が始動して、地上の歴史家には全く無意味な隠れた小さな親切によって、この世界は変わるのだ。

(ディクソン兄弟は英国南伝道部クローリー地方部ブライトン支部長を務めている。)

与えることのあと半分

ルネット・H・リード



何年か前のことです。ある扶助協会の会長が、責任を受けている間は夫のありがたさに無頓着になっていたが、大病をしてみても、自分が食べるとか入浴するという日常生活に限らず生活の全般で夫に依存していることを改めて知ったと話していました。

この出来事は彼女にとって大きなショックでした。他人への奉仕に多くの時間をさいていた彼女にとって、人に頼るという新しい立場を受け入れるのには抵抗がありましたので、できることなら頼りたくないと思いました。しかし、やむをえず人の助けに頼った結果、人々に対する深く大きな愛を新たに知ることができ、今ではそのことを感謝しています。

自分が人に依存しているということに無頓着なのは、だれにもあることです。パウロはコリントの昔の聖徒たちに手紙を送って、その危険を警告し、だれもが教会全体に貢献できる大切な賜を持っていると教えました。パウロは、すべての人が他の人々を必要としていることを認めなければならないと、慎重に力説しました。

「目は手にむかって、『おまえはいらない』とは言えず、また頭は足にむかって『おまえはいらない』とも言えない」(Iコリント12:21)

主は、みんながより強い愛の絆で結ばれることを望まれました。

「それは、からだの中に分裂がなく、それぞれの肢体が互いにいたわり合うためなのである。もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である」(Iコリント12:25-27)

私たちが謙遜になってより強い愛の絆で結ばれるためには、奉仕することと奉仕されることの両方の経験をしなければなりません。

この両方のことは、福音の随所に例が見られます。神権の儀式には、「バプテスマを受けること」と「バプテスマを

施すこと」、「聖任されること」と「聖任すること」のように、やはり両方があります。福音が地上に宣べ伝えられる出来事もそうです。主ははっきりした目的をもって、福音はまずユダヤ人に伝わり、それから彼らが異邦人にそれを伝えと定められました。それが末の時代には逆になりました。キリストのみ言葉については、現在異邦人がユダヤ人のために働き、ユダヤ人は受ける立場になっています。

この両方の要素は男性と女性の関係についても言えます。対等の責任はたくさんありますが、男女共に相手に祝福をもたらす機会があります。しかし最終的な責任は神権者にあります。女性は謙遜になるときに神権者の手からたくさんの祝福を受けることができます。しかしそうは言っても、神の計画では男性も同じです。夫や子供たちの生活に潤いが与えられるのは、女性あってこそなのです。男性に神権、女性に母性を与える計画ほど、男女が相互に奉仕し合うのにぴったりの計画があるのでしょうか。また、お互いを必要とする結びつき以上に、愛を強くする方法があるのでしょうか。

それは、キリストのまことの愛の心髄でもあります。私たちが昇栄するには他人への奉仕が不可欠ですが、それもキリストの贖いを受け入れなければ、それだけでは不十分です。

私たちは、主御自身の一生でも、多くの時期、主が人々の必要を満たしておられたことを知っています。でも、主が人々からの奉仕に御自分をゆだねられたことは、あまり考えないのではないのでしょうか。

主は死すべき体を持つ女性から生まれ、その女性によって育てられ、教えを受けました。

主は罪がありませんでしたが、死すべき体を持つ人間からバプテスマをお受けになりました。

埋葬には他人から油を塗ってもらいました。

キリストは日常の生活で人々から簡単な奉仕を受けておられます。人々の家に滞在し、食事をし、宿を借り、墓所まで人から借りたのです。主は自らを低くして他の人に奉仕されたように、自らを低くして人々から多くのものを受けられました。

一番の例は最後の晩餐のときに見られます。キリストはその場で、ひざまずいて弟子の足を洗い、奉仕の原則をはっきりと示されました。主は奉仕を教えられましたが、同時に受けることも教えられました。ペテロは、私たちも奉仕を受けるときによくするように、身を退けて、「わたしの足を決して洗わないで下さい」と言いました。

キリストはそれに答えてこう戒められました。「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる。」(ヨハネ13:8)

私たちに、救い主の奉仕、ひいては救い主のみ名によって私たちに奉仕するすべての人々に自分をゆだねることが本当に必要です。

大切なことは、人々が私たちのために払ってくれる犠牲を謙遜に、真心から感謝して受けることです。自分をも相手をも尊重してそれを受けることができなければなりません。特に、どの賜も結局は万物の創造主から来ることを忘れてはなりません。奉仕する人とされる人がこの事実をよ

く認識すれば、奉仕は必ずや人々に対する、また私たちの共通の御父に対する愛の新たな原動力となるに違いありません。

私自身、卒中を患った姉妹と一緒に家庭訪問教師として働いたときに、受けるということについて、とても大切なことを学びました。彼女は右手右足がまひしていました。松葉杖を頼りに歩くことはできましたが、坂や道の悪い所は大変な苦勞でした。話すことやそれを相手に理解してもらうこともとてもむずかしい状態でした。彼女は驚くほどいろいろなことができました。彼女にできないこともたくさんありました。

初め、私たちの交際はどうしようもない一方通行のように思われました。運転は私だけ、彼女を車に乗せてあげたり、階段の昇り降りをさせてあげたりしなければなりません。彼女はときどき何かを話しましたが、訪問先でのレッスンや会話は私ひとりの肩にかかっていた。

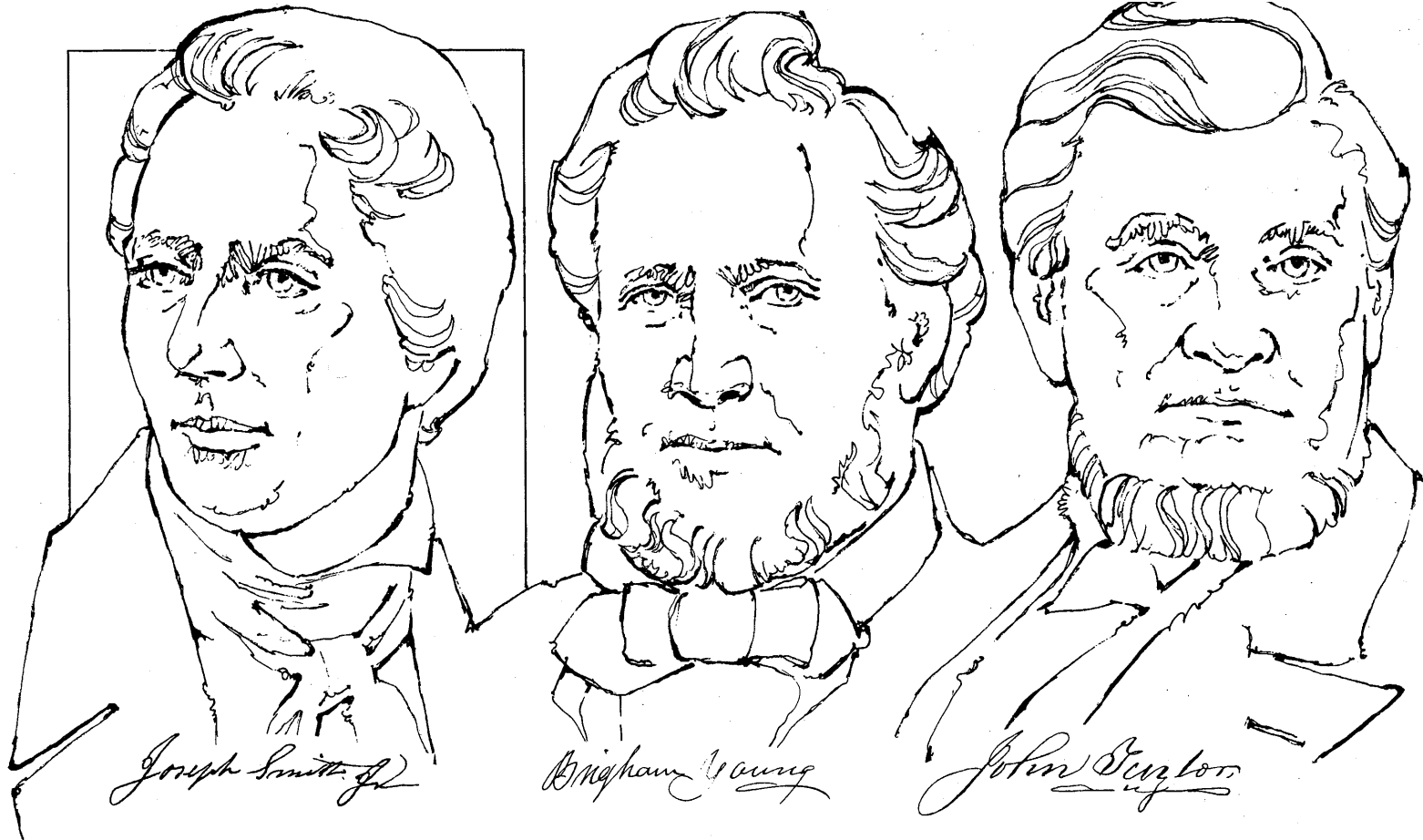
そんなときに珍しいことが起きたのです。ちょっとしたことで、私の車の運転席のドアがきかなくなりました。この珍しい出来事から、強者である私は自分が弱い人に頼っていることを知ったのです。

訪問先ごとに、私が手をこまねいて待っている間、彼女は左手と松葉づえでやりにくそうに一生懸命重いドアを開け閉めしました。この突発的な出来事で、一度は座席の背を越して出ようかと考えたのですが、スカートだったのでとても無理でした。それで彼女にそうしてもらうしかなかったのです。でも、その奇妙な窮地に陥ったおかげで、私たちは前よりも親しい良い同僚になれました。彼女には私が必要でしたし、私にも彼女が必要でした。彼女を頼りにしたあの出来事は、一緒に家庭訪問をしていた間に彼女から受けた目に見えないたくさんの賜のほんのひとつでした。レッスンの間に彼女があまり話せなかったことも、担当家族の姉妹に目に見える奉仕ができなかったことも事実です。しかし、彼女は一度ならず、率先して霊的な力が必要な姉妹たちのために断食とお祈りをして下さいました。

マラキが、だれが神のものを盗むだろうかと問うたとき、什分の一を納めないことを言ったのですが、神のものを盗む行為はまだほかにもあります。ふさわしい人はみな、賜や祝福をもって神の栄光の幾分かを反映しています。従って、私たちが他の人の差し出すものを拒絶するとき、それはせんじつめれば、その賜が表わしている神の栄光を拒否することになります。主の僕を拒むことは、差し出された祝福が霊的なことでも物質的なことでも、とりもなおさず主を拒むことになります。

教会をキリストの体と考え、教会員を体にとってどれも大切なそれぞれの肢体と考え、お互いを真剣に認めて、「頭さん、あなたがが必要です。足さん、あなたがが必要です。目さん、あなたがが必要です。手さん、あなたがが必要です…」と考えること。パウロのその勧告に真心から聞き従うのはどんなにか賢明なことでしょう。

(ルネット・ハドリー・リード 5児を持つ主婦、合衆国オクラホマ州タルサに在住。)



予言者を知る人々

1805年12月23日は予言者ジョセフ・スミスの誕生日であり、12月はその誕生を祝う月でもある。

末日の予言者の幾人かはジョセフ・スミスを知っていた。ある人は、ブリガム・ヤングのように、友人、隣人、良き助言者として。またある人はウィルフォード・ウッドラフの場合のように夢や示現を通じて。そしてジョセフ・スミスはすべての予言者たちに、キリストの教会の諸事を導くための靈感や慰めを与えてきた。

他の予言者がジョセフをさして言うときの尊敬、畏敬は、この青年指導者をよく言い表わしている。

ジョセフは自分自身をこう語った。
「私は高い山から転がり落ちるごつごつした巨岩のようである。他のものと触れ、狂信的な宗教家、法律家、知

識人の陰謀、編集者の虚偽、判事や陪審員の偽証、暴徒や冒瀆者や放蕩者が腐敗した男女のうしろだてを得た、権威ある行政府の偽証にぶつかって初めて角がとれ、磨かれる。あらゆる悪に打ち叩かれて角を削り落とされる。こうして私は全能者の矢筒の中のなめらかに磨かれた矢となるのである。』(Teaching of the Prophet Joseph Smith 「予言者、ジョセフ・スミスの教え」 p. 304)

ブリガム・ヤングは予言者に抱いている大きな愛についてしばしば語り、死ぬときもジョセフの名を繰り返しながら死んだ。彼の説教を代表する次の言葉は、ジョセフに対する愛と賞賛を

表わしている。

「私はジョセフ・スミスの名を誉れとし、尊敬する。私はその名を聞くことを喜びとし、その名を愛する。私は彼の教えを愛する。」(Journal of Discourses「説教集」第13巻 p. 216)

「私がジョセフ・スミスに会ったとき、彼は比喻を用いて言えば、天界を捕えて地上に降ろし、地上を捕えてそれを引き上げ、簡潔、簡明に神の事柄を開いて見せてくれた。それが彼のうるわしい使命である。」(Journal of Discourses「説教集」第5巻 p. 332)

「イエスが生きておられ、世の救い主にましますならば、ジョセフ・スミスは神の予言者で、父アブラハムの懐



に生きている。彼は殺されたが、しかし現在彼は生きて天の御父のみ顔を仰いでいる。その衣は神の王座を取り巻く天使たちのごとく清い。イエスは生きてましますと言いながら、予言者ジョセフに関する私の断言を否み得る者はこの地上にいない。』(「説教集」第1巻 p. 38)

ジョン・テイラーは、暴徒がカーセージを襲撃し、予言者を殺害したとき、彼と同室にいた。そのために負傷したが、やがて回復し、後に第3代大管長となった。生前にジョセフと知り合い、その死を目撃した彼は、予言者について痛哭の弔詞を送っている。

「私は長年ジョセフ・スミスと交流があったことを申し上げる。私は彼と共に旅をし、公私の別なく彼と交わり、あらゆる会議で彼と席を同じくし、何百回となく公の場で彼の説教を聞き、また友人やもっと個人的に親しい人々への彼の助言を聞いた。彼の家に滞在して、家庭での言動を見た。郡法廷に問われる彼を見、無罪潔白とされて、悪らつな中傷の嵐を逃れ、腐敗した邪悪な人々の虚偽と陰謀から解放され

る彼を見た。私は生前彼と共におり、だれだかわからないように顔を塗りたくった残忍な暴徒たちの手にかかって彼がカーセージの牢獄で暗殺されたとき、彼と共にいた。私はそこにいて、自分も傷を負った。私はその場で体に4発の弾丸を受けた。私はこのように様々な状況の下で彼を見てきたが、神と天使たちと人々の前で証する。彼は善良で立派な徳高い人物であった。……その公私にわたる人格は非難の余地なく、……彼は神の人、紳士として生き、また死んだ。これは私の証である。』(The Gospel Kingdom「福音の王国」p. 355)

ウィルフォード・ウッドラフは生前も死後もジョセフ・スミスと交流があった。彼はジョセフと一緒に何千キロもの旅をし、筆記者として彼の補助をすることもあった。南北戦争に関してジョセフ・スミスを通じて与えられた啓示を筆記したのは、ウッドラフ兄弟である。(教義と聖約87参照) 彼は「ミレニアルスター」誌に、予言者ジョセフとの喜ばしい、しかも衝撃的な出会いをこう語っている。

「私はジョセフに会う前、彼が何歳であろうと、どんなに若かろうとかまわない、どんな容貌であろうと、髪が長かろうと短かろうとかまわない、この啓示を私たちに与えた人が神の予言者なのだと言っていた。そして私はそのことを知っていた。私はカートランドの通りで初めてジョセフに会った。そのとき彼は古い帽子をかぶり、手にピストルを持っていた。そしてこう言った。『ウッドラフ兄弟、標的練習をしてきたところなんです。腕前を見ていただきましたか?』そして『異議がおありですか?』と。私は『いえ、全然。標的を撃ってはならないという法律はありませんから。わかっています』と返事した。彼は私を家に誘うと、狼の皮を持ってきて、なめすのを手伝ってほしいと言った。御者台に敷くためということであった。ここで、『それでも予言者ですか。ピストルを撃って、狼の毛皮をなめすとは』と言う人も多いかもしれない。しかし、私たちは一緒に皮をなめし、長旅でそれを使

った。これが予言者ジョセフとの出会いであった。その日から現在に至るまで、多くの背教者が出、あらゆる困難、苦難があったにもかかわらず、私はこのみ業に関して一瞬たりとも疑問を抱いたことはない。またこれについて試みを受けたこともない。右に左に人々が背教し、使徒たちが予言者ジョセフへの敵対をあおるときも、このみ業を疑ったり、ジョセフ・スミスが神の予言者であることを疑ったりする誘惑を感じたことはなかった。』

(Millennial Star「ミレニアルスター」第53巻、p. 627-628)

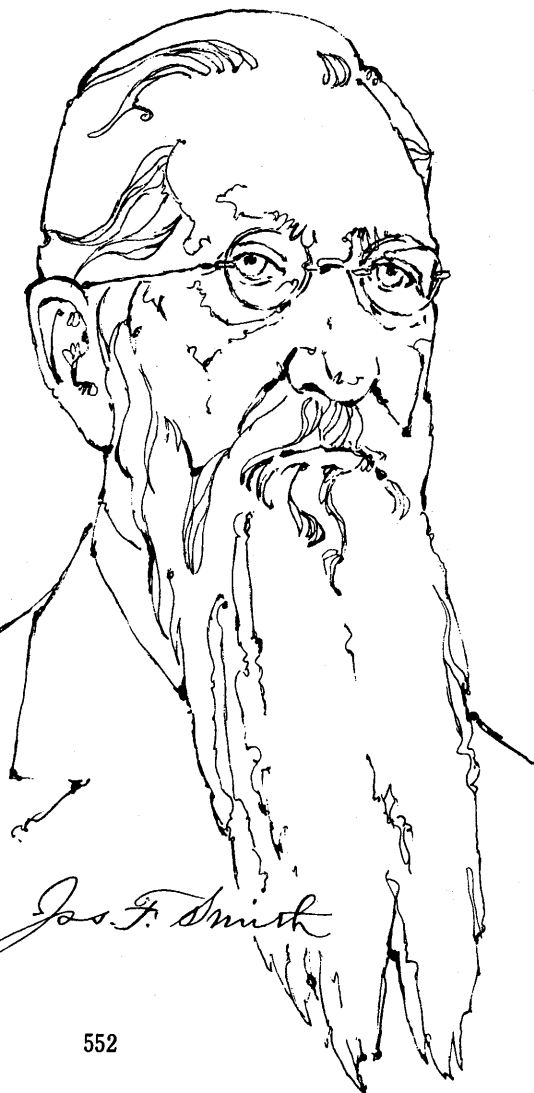
ウッドラフ大管長は、「ジョセフは死後も何回となく私を訪れ、重要な原則を教えてくれた」と語っている。あるとき英国に向かう船上でジョセフ・スミスとハイラム・スミスの訪れを受けた。彼の言葉によると、「とりわけ神のみたまを受けるように。これはすべての者に必要であると私に語った」という。(Discourses of Wilford Woodruff「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」p. 288)

ウッドラフ兄弟は1896年10月19日に語った話の中で、次のように述べた。

「ジョセフ・スミスはある時期まで引き続き私や他の人々を訪れ、やがて訪れがなくなった。私が最後に彼を見たのは天上においてであった。夜の示現の内に、私は天上の神殿の入口のところで彼に会った。彼は私のところに来ると、急いでいるので話している暇はないと言った。……地上で責任のあった兄弟たち6人とも会ったが、どれも急いでいて話ができなかった。私は非常に驚いた。間もなくまた予言者を見かけて、今度は彼に質問することができた。

『どうしてお急ぎなのか教えてください。私はずっと忙しい生活を送ってきましたが、天の王国に入れば、そこで忙しさも終わると期待していました。』

するとジョセフは言った。『わけを教えましょう、ウッドラフ兄弟。地上で神権を得てこの日の光栄の王国にやってきましたすべての神権者には、救い主が地上を統治されるときに一緒に地上に行けるように備える仕事は、たく



さんあるのです。各神権時代にはその仕事をする時間が十分あります。しかし私たちにはありません。最後の神権時代ですから、短い時間で多くのことをしなければなりません。そのために急がなければならないのです。』(「ウィルフォード・ウッドラフ説教集」

p. 288-289)

ロレンゾ・スノーはジョセフ・スミスと親交があり、予言者の召しをはっきり理解していた。スノー大管長はジョセフについて次のように語っている。

「このみ業を確立するために神が選ばたもうたジョセフ・スミスは貧しく、教育はなく、キリスト教の有名宗派にも属していなかった。彼は平凡な少年で、正直、誠実一途、そして、陰謀を遂げようとする策士や宗教偽善者好みのべてん、悪知恵、詭弁とはまるで縁遠かった。不人気きわまりない宗教改革者の役に任じられ、大神学者たちの是認を受けて年月を経た教義や見解と闘うというこの仕事に、彼はいにしへのモーセのごとく、無力感と資格のなさを感じた。しかし神は、あらゆる国の謙遜で正直な人々を霊的、物質的な束縛から解放するために、彼を召された。罪の赦しのバプテスマを正直な目的をもって受ける人はみな神よりの現われを受け、聖霊を受ける。古代の使徒たちが説いた同じ福音によって約束され、与えられるその福音の祝福を受ける。神はまたその教えと約束が、神より権能を授けられた使者である長老たちが携え行くあらゆる場所、あらゆる人々に及ぶと、彼に約束された。ジョセフ・スミスが、教育なく、世慣れせず、単純、率直、正直なこの少年ジョセフ・スミスがそう語ったのである。」(エライザ・R・スノー、*Biography and Family Record of Lorenzo Snow* 「ロレンゾ・スノーの伝記と家族の記録」p. 243)

ジョセフ・スミスの生涯を深く洞察できたのは、予言者を予言者としてのみならず叔父として記憶する、兄ハイラムの息子、ジョセフ・F・スミスであった。予言者が暗殺されたとき、まだ子供であった彼は、ジョセフを次のように回想している。

「私は子供のときに予言者ジョセフ・スミスを知った。子供のときに私は、彼が神から託された福音を説くのを聞いた。彼の家にいるときは、まるで自分の父の家にいるようだった。私は気高い母から、ジョセフ・スミスは神の予言者で、これまで何世紀にもわたってだれにも与えられなかった靈感を受けた人であり、神の王国、つまり神の教会の基礎を置くために神から選ばれたことを教わった。こうして私は、ジョセフが神の力によってこの大陸の古代の住民の記録を世に出したことにについて堅い証を受けたのである。彼は、この大陸でリーハイの子孫たちに教えられた、イエス・キリストの教えを世界に回復し、明らかにしたのであった。子供であった私は予言者ジョセフを通じて与えられたこの教義と聖約の書の中の啓示が古代の弟子たちが御父と御子について伝えた言葉と同じ、神のみ言葉なのだと心に強く感じた。」(ソルトレーク・アセンブリーホールでの説教、1917年7月8日)

予言者の愛する兄の子である彼は、ジョセフ・スミスの慈父のような愛をも知っていた。子供たちに対する彼の愛を、ジョセフ・F・スミスはこう語った。

「彼の著しい特質のひとつは、子供たちへの愛である。子供を見かけると必ず抱き上げて祝福してあげたいという気持を抱き、実際にいつも子供たちを抱きあげひざにのせて祝福していた。私自身も彼のひざに座った経験がある。非常な子供好きで、我を忘れて小さい子と話しこんだが、私はそれが本当の男らしさの大きな特徴だと思う。彼は人間を心底愛した。私は子供の頃から今もずっと、彼が神の予言者であることを知っているが、彼の神聖な使命を心から信じ、彼が受けた啓示と彼が器となって世に出したモルモン経が靈感による真実確かなものであることを知っていた。」(「*Improvement Era* 「インプルーブメント・エラ」第21巻、p. 168)



小さな
お友だちへ



8 さいの バプテスマ

え：テッド・ヘニングー

かぞくがみんなきょうかいいいんになったとき、アリスは6さいでした。みんなは、バプテスマのぎしきがどんなにすばらしかったか、きょうかいいいんになれて、どんなにしあわせかをなしました。アリスは、はやくバプテスマをうけたくて、しかたがありませんでした。

アリスのバプテスマの日、つまり8さいのたんじょう日の3日まえのことです。アリスはひどくあたまがいたくなって、がっこうへいけなくなってしまいました。おいしゃさんは、1しゅうかん、ねていなければいけない、といいました。

たんじょう日のまえの日になっても、ねつはさがりませんでした。アリスはベッドの上にすわって、おいのりしました。あたまがいたいことよりも、ねつがさがらないことよりも、バプテスマをうけられないことのほうが、かなしかったのです。

つぎの日のあさ、かみさまはアリスのおいのりに、こたえてくださいました。ねつがさがっていたのです。アリスはきがえをし、バプテスマをうけるじゅんびをしました。そして、その日のゆうがた、バプテスマをうけることができました。



すばらしいプレゼント

おはなし：ドーリー・ヒルドレス
え　　：シェリー・トンブソン



ひこうきがついらくして、しま中が大さわぎになった。パイロットはたすかったがにもつは、みんなやけてしまった。ひこうきは、しまの人たちのクリスマスプレゼントを、つんでいたのだ。

マシューのお父さんは、海りゅうをしらべるために、しまにやって来て、今は、しまのきょう会のしぶ長だった。今年のクリスマスには、しまの人たちにモルモンけいをプレゼントしようと、けいかくしていた。あのひこうきで、モルモンけいが来るはずだった。

マシューはすなはまにすわって、ぼんやり空をながめながら考えた。「お父さんは、どんな気もちでいるんだろう。やっぱり、がっかりしているんだろうな。」日がくれて、月がのぼった。何時間もすわっていた。そして、ふといいことを思いついた。これ

なら、みんながよろこんでくれるにちがいない。つぎの日の朝早く、マシューはウィルソンさんのみせへ行った。

「お早ようございます、ウィルソンさん。きれいな紙とはこをください。それから、クリスマスのプレゼントを作りたいんですけど、少しのあいだ、おくのへやをかせてくれませんか。」

それからマシューは、えのぐと、えんぴつと、白い紙を、みせのおくのへやへはこんだ。何日かのあいだ、ひまさえあればウィルソンさんのみせへ行った。まず、白い紙にヒイラギや、すずや、ゆきをかいて、つつみ紙を作った。それから、白い小さな紙に、モルモンけいのせいくを書いた。そして、それをはこの中に入れ、つつみ紙でつつんだ。クリスマスの日には、すっかりできあがった。マシューは、それを大きな

はこに入れて、家へもってかえり、お父さんとお母さんに、しぶのクリスマスパーティーのとき、かいいんにくばるのだと話した。お父さんもお母さんも、うれしそうに目をかがやかせて、プレゼントの山を見ていた。しかし、中に何が入っているのかは、きかなかった。

その夜、しぶのクリスマスプログラムが行なわれた。お父さんがクリスマスのもものがたりを話すあいだ、マシューはうれしくてしかたがなかった。

プログラムがおわりにちかづき、お父さんは、みんなにマシューがプレゼントを作ったことを、はっぴょうした。かいいんたちは目をかがやかせて、きれいなつつみ紙のプレゼントをうけとった。そして、何が入っているのかと、いそいで、はこをあけた。しかし、だれよりもはこの中を見たがっていたのは、マシューのお父さんだった。お父さんは、中に入っていた小さな紙きれをとり出して、そこに書かれている文字を読んだ。そして、お母さんとかおを見合わせて、なみだぐんだ。

「どうして、こうしようと思ったんだい。」お父さんは、マシューにそっときいた。

「だって……しまの人たちは、お父さんが本国へちゅうもんしたモルモンけいをこ

ころまちにしていたんでしょ。だから、ぼくのモルモンけいを、みんなに分けてあげたかったの。」

「すばらしいプレゼントだよ。」お父さんは声をつまらせながらいった。

マシューの心に、よげんしゃアルマのことばがひびいた。「あなたたちの……よい行いによって、……今からとこしえにいたるまで、神の平和を受けんことを、いのりたてまつる。……」



せかい中のおともだちへ



せかい中の小さなみなさん、クリスマス
おめでとうございます。このクリスマスの
きせつに、天のお父さまが、とてもたいせつ
なものをとおくってくださいたことを、おも
いだしましょう。それは、イエスさまが今
も生きていらっしゃり、今、このちきゅう
の上に、そのきょうかいがあるというメッ
セージです。

みなさんの中には、もう、でんどうにい
くじゅんびをしている人もいるでしょう。
でもでんどうは、今すぐにでもできるので
す。そうです。おともだちに、きょうかい
のことをおしえてあげましょう。

よの中には、イエス・キリストのきょう
かいがあることをしらない人が大ぜいいま
す。でも、ちきゅうにすむ人はみんな、ジ
ョセフ・スミスが天のお父さまとイエス・
キリストにあったことを、しらなければな
りません。それをはなすのは、少しゆうき

のいることかもしれません。でも、おとも
だちが、それをきいてほんとうにこうふう
になったら、どんなにすばらしいでしょう。
きょうかいの人は、みんなせんきょうしで
す。むかし、ベンジャミン王はこういいま
した。「お前^{まへ}たちが同胞^{はたらから}のために務^{つと}めるの
は、ただお前^{まへ}たちの神^{かみ}のために務^{つと}めるので
ある。」

このクリスマスのきせつに、すくいぬし
がわたしたちに、なにをしてくださったか
をおもいだして、おともだちにも、おなじ
ようにしてあげましょう。

たのしいクリスマスをごしてください。

大管長会 スベンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

James M. Smith
Weldon Tanner
Marion G. Romney



ひとたばのむぎ



今年もクリスマスが、ちかづいて来ました。エレナの家では、クリスマスのきせつになると、ちょっとかわったことをしました。まぐさおけをよういして、ひとつよいことをするたびに、むぎをひとたば入れるのです。それは、ハンガリーのクリスマスのしゅうかんでした。

今年、エレナの家には、たくさんのおめぐみがありました。まず、お父さんのおみせがはんじょうしました。それから、おばさんのびょう気がよくなりました。何よりすばらしいのは、エレナに弟が生まれたことです。

べんきょうがおわると、エレナは、きんじょを一けん一けんまわって、プレゼントをしたり、クリスマスのあいさつをしたり、お手つだいをしたり、たくさんよいことをしました。でも、エレナはもっと何かしたいと思いました。

「これじゃあ、いつものクリスマスと同じだわ。何か、とくべつよいことをしたいわ。今年

は、たくさんおめぐみがあったんですもの。」

クリスマスイブに何をしたらいいか考えながら歩いていると、村で一番大きな家の前に来ました。

「ここにすんでいるおじいさんのために、何かできないかしら。」 エレナは思いました。おじいさんはお金もちで、何でもしてくれるめしつかいがいました。でも、ときどきポーチで見かけるかおは、さびしそうでした。エレナは、ふと、その家に行ってみようと思いました。ゆう気を出して、げんかんまで行

き、ドアをノックしました。むねがドキドキしました。ギューッとドアがあき、いかめしいかおをした、めしつかいが出て来ました。

「何かご用でございますか。」

「ここのおじいさんと、お話したいんです。」 とエレナはいいました。

「どうぞ、こちらでございます。」 めしつかいは、エレナをあんないして、おくのへやへ入って行きました。

ドアをあけると、おじいさんは、エレナにせをむけて、すわっていました。大きなだんろがあかあかともえていました。

エレナは、おそろおそろ話しかけました。「あのう……今年、わたしの家にたくさん、天のお父さんのおめぐみがあったんです。」 おじいさんは何もいませんでした。きときこえないのだと思って、エレナは前へまわって、話しつづけました。「それで、わたし、何かよいことをしようと思って……。まぐさおけをいっぱいにするためじゃないんです。ただ、わたしが神さまに、どんなにかんしゃして



いるか、わかってほしいんです。もちろん、わたし、何も買ってあげたりすることはできません。でも……。わたし、考えたんです。ときどき、来てあげます。そして、本を読んであげます。……。あたたかくなったら、さんぽもできます。……。もちろん、おじいさんがそうしてほしければですけど……。」

エレナは、おじいさんをおこらせてしまうかもしれないと思いました。でも、そのはんたいでした。おじいさんの白くもったひとみから、ほほをつたって、なみだがこぼれました。

「ありがとうよ。天のお父さまは、わしにこんないい子をつかわしてくださった。わしにもおめぐみをくださった。また来

ておくれ。たのしみにしているよ。」

「クリスマスのつぎの日に来ます。」 エレナはいいました。心の中があたたかくなって、うれしくてしかたがありませんでした。

その夜、エレナは、またむぎのたばを、まぐさおけに入れました。なんだか、そのひとたばで、おけがいっぱいになったようでした。

「おじいさんに、しんせつにしてあげてよかった。あんなことができたなんて、自分でも信じられないわ。」 エレナは心の中でいいました。「きっと、この村には、友だちをほしがっている人が、もっといるにちがいないわ。」

おもちゃばこ

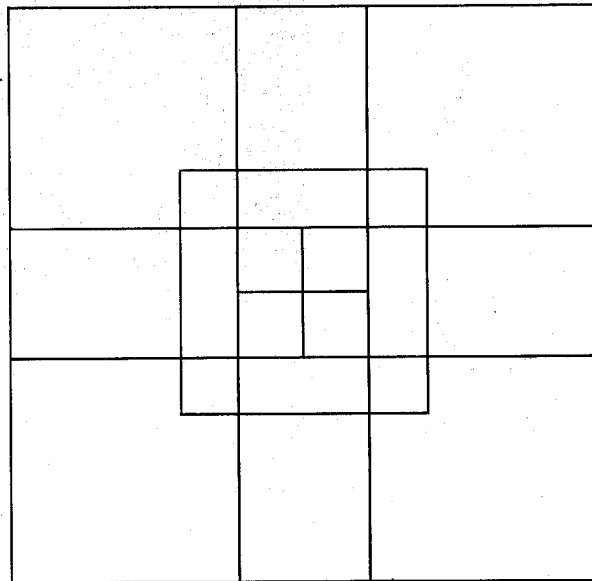


数あてゲーム

まず、だれかにひとつのすうじを、思いうかべてもらいます。そのすうじを、あてるゲームです。

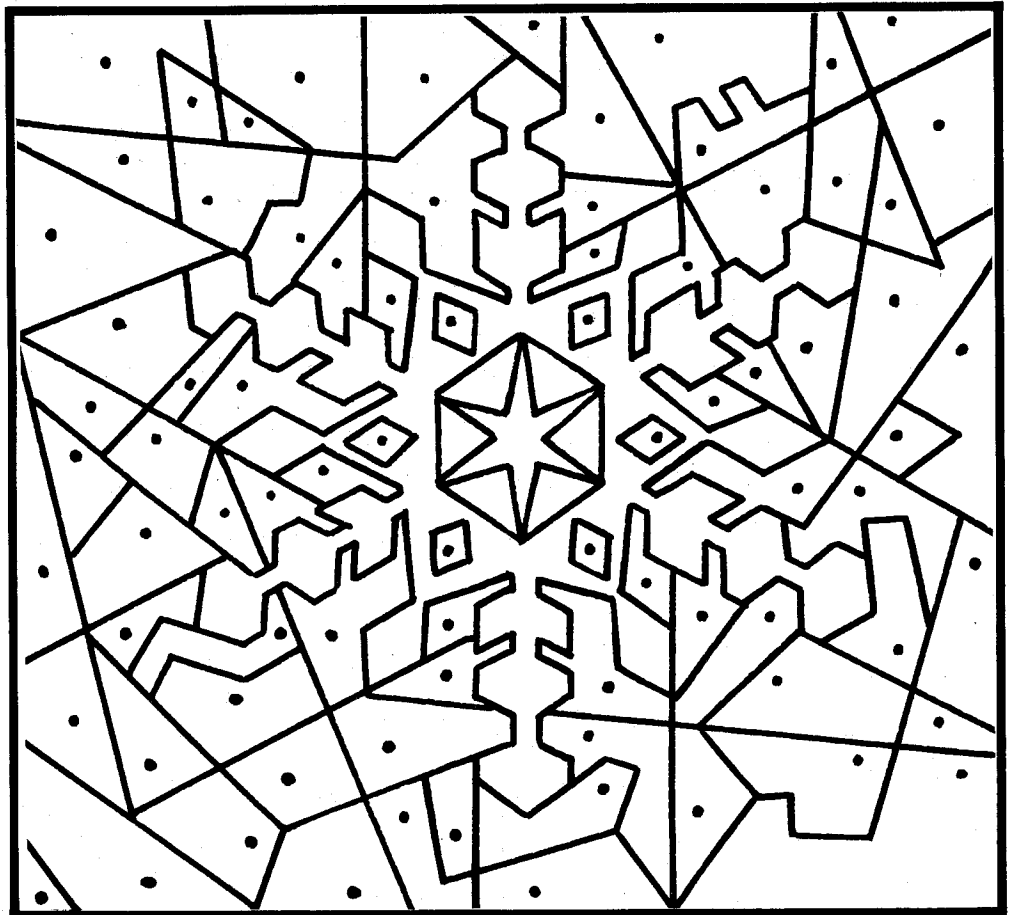
その人に、そのかずを2ばいして、40（ぐう数であればいくつでもよい）をたして、2でわったかずをいってもらいます。そのかずから20（あなたがたすようにいったかずの、はんぶん）をひいたかずが、その人の思いうかべたすうじです。たとえば……

はじめに思いうかべたかず…12
 その2ばい……………24
 40をたす……………64
 2でわる……………32
 20をひく……………12



ましかくはいくつ
 ありますか。みか
 けほど、やさしく
 ありませんよ。

てんのところを、
 ぬりつぶしてみま
 しょう。なにが、
 できるかな。



悦びは果していかにばかりぞや

マリオ・G・エケベルリ

私はコロンビア東部の小さな町の出身です。私がこの教会を知ってバプテスマを受けたのはその町で、伝道しようという望みが生まれたのもそこでした。福音を受け入れたのは家で私ひとりでした。

私は自分の伝道の準備として、ほとんど毎晩宣教師と一緒に働きました。彼らにどこへ伝道に行きたいかと聞かれると、「ベネズエラでなければどこでもいい」と答えていました。コロンビアとベネズエラの関係が非常に悪化していたときで、ベネズエラ人に対して愛がほとんどなかったもので、そんなふうに返事したのです。

月日がたって、私は伝道部長から伝道の面接を受けました。その質問のときに「兄弟、主がお召しになる所はどこへでも行く覚悟ですか」と聞かれました。私はすぐさま「はい」と答えました。すると伝道部長は身を乗り出して私の目を見つめながら、「主があなたをベネズエラに召すと言われても？」と聞きました。私はそのとき、伝道部長は私の心をご存知だと思いましたが、少ししてから、主がお遣わし下さるところならどこへでも行きますと答えることができました。でも、そのときも心の中では、ベネズエラ人はとても好きになれないと感じていました。

やがてある日、大きな封筒が届き、その中には……ベネズエラ伝道部への伝道の召しが入っていました。

その夜、私はひざまずき、ベネズエラに行かせないで下さいと祈りました。しばらく祈った後で、どうか助けて下さい、助けが必要ですよと言いました。それから立ち上がってあかりをつけ、教義と聖約をばらばらとめくり始めると、53章に目がとまりました。そこには主からの答えがありました。「見よ、……われ汝の祈りを聞けり。而して汝は……汝の召と選びとに就きて、主なる汝の神によりて知らんことを求めたり。

汝、長老となるわが聖任を引き受けてわが言に従い、信仰と悔改めと罪の赦しとまた按手によりて聖霊を受くることを説くべし。また汝は……監督の任命する地に於てこ

の教会の代理人となるべし。

重ねて言う、わが願うは終りまで忍ぶ者のみ救わるるを汝の知らんことなり。」（教義と聖約53：1、3-4、7）

私は聖典を閉じ、再びひざまずきました。このときは謙遜になっていました。涙がほおを熱くつたい、私は祈りの中で、み旨を求めた私を許して下さいと主に願いました。

ベネズエラの方角を向き、ワイシャツとネクタイをつけた私の心に大好きな讃美歌が浮かんできました。

「主により語るとき 愛を語り得ん

罪の道にさまよう 人を探し得ん」

（讃美歌100番「山の上や荒れる海を」）

私は、救われることの必要な大勢の人たちに出会いました。その中の幾人かは、今では神殿に行き、ベネズエラの教会の指導者になり、自分自身でも伝道しているのです。それは聞いてでした。私はそれに勝って、心から彼らを愛することを知ったのでした。

私はベネズエラ人から大きな愛と満足を受けました。そして今、私がどうしてあのぶどう園に遣わされたのかわかるようになりました。

一番の祝福は、解任されてすぐ後に、母がバプテスマを受けたことでした。

人を主の王国に導く者に主が約束しておられる喜びを、私は知っています。私は、これがイエス・キリストのみ業だということを体験を通して知りました。回復された教えを待っている大勢の人々に伝えることは私たちの責任であり、そのための一番の道はフルタイムの伝道に出ることだということを知っています。イエス・キリストのみ名によってお話いたします。 アーメン。

（エケベルリ兄弟はベネズエラ、カラカスのセミナー・インスティテュートの指導主事である。）

忠実な者となりなさい

七十人第一定員会会員
レックス・D・ピネガー

1895年5月の、あるむし暑い昼下りがりのことだった。ふたりの宣教師が、テネシー州スミスビルの近くにある、うっそうと木の生い茂った山道を登っていた。彼らは、町の人々から受け入れてもらえなかったため、山あいの村落に改宗者を求めてやって来たのだった。そこに住む人々は、傾斜地のやせた農地を耕して生活していた。長老たちは、そこへ何の乗物にも乗らず、財布も旅の袋も持たずに、ただ主のみたまと自分たちを必要としてくれる人々の好意にのみ頼って、はるばる足を延ばして来たのである。

日も暮れかかった頃、その宣教師たちは、私の祖父ハービー・アンダーソン・ピネガーとその若い家族の住む、粗末な小屋に到着した。祖父は以前、彼らの集会へ行行って教えを聞き、彼らに食物と寝の場所を提供すると約束したのである。宣教師たちは、その申し出を心から感謝して受け入れた。ハービーとその家族は、長老たちと共に食事をし、眠り、そして生活した。3人の子供たちは屋根裏で眠り、祖父母たち夫婦は小屋の片隅の床にわらぶとんを敷いて眠った。そして唯一のベッドには、長老たちが眠った。この粗末な山小屋の中で、宣教師たちは、祖父とその家族に、イエス・キリストの真の福音を教えたのである。

祖父は、日記の中に次のように書いている。

「私は、彼らの教えを入念に研究した。そして彼らが、地上で唯一の真実の教会の人々であるという確信を得るに至った。そこで、1895年5月14日……私たち夫婦は、オーウェン・M・サンダーソン長老からバプテスマを受けた。テネシー州デカゴ郡第7地区にあるジョーンズミルの数ヤード上手のシンククリークでのことであった。しかし、このために私の親戚から大きな不平不満が出た。けれども、私は天父のみこころに従い続けた。この教えが神からのものであって、人からのものでないことを知っていたからである。」

約100人の人々が、ハービー・ピネガー、ジョシー・ピネガー夫妻のバプテスマを目撃した。

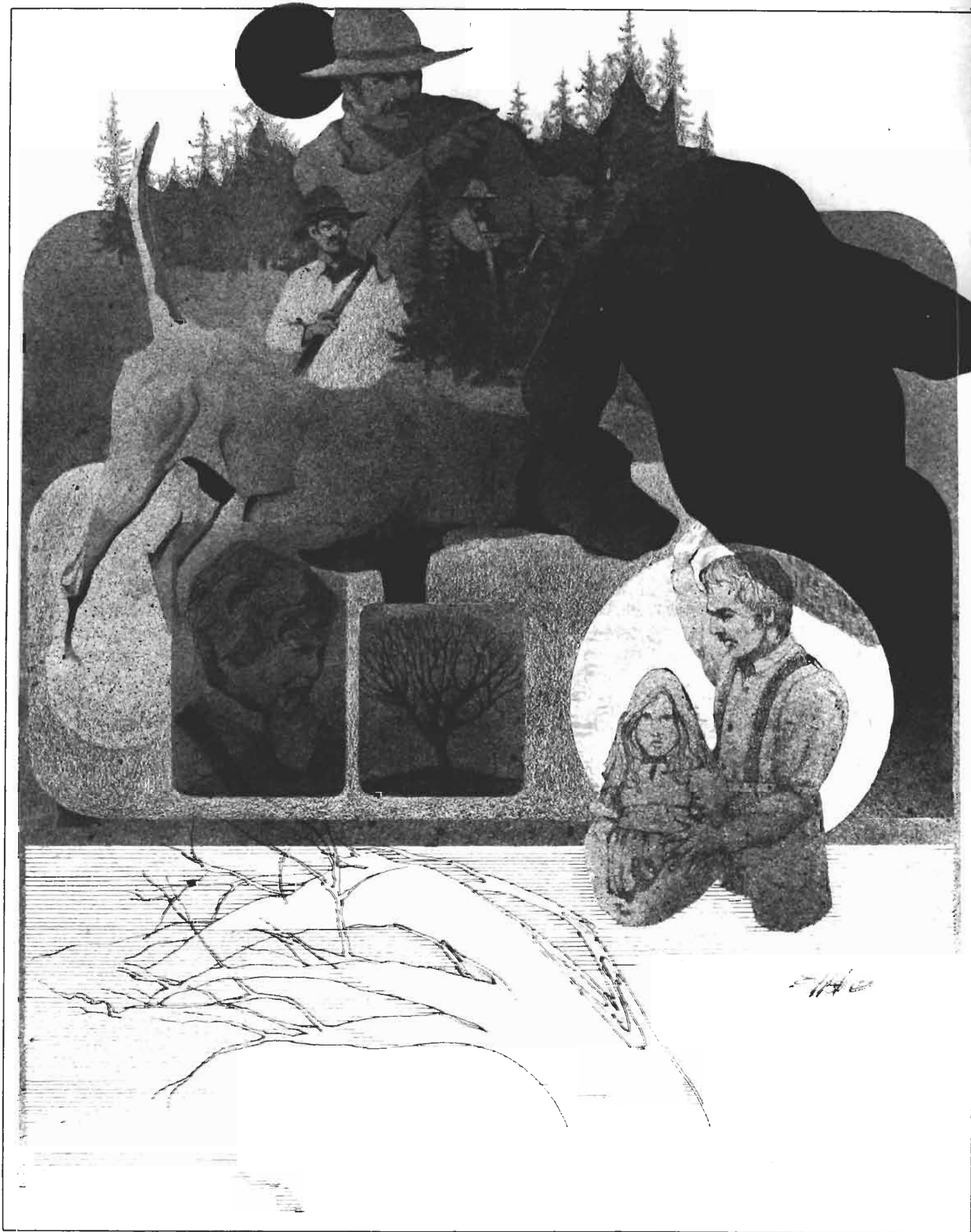
この地方の人々の間でも、「モルモン教」に対する反対の声が起きていた。ハービーは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となったことで、本当に幸福であった。しかし彼の兄弟や姉妹、両親や隣人は、これを受け入れようとはしなかった。間もなくハービーは、その地域の中でも、家族の中でも遅からず反対に直面せざるを得なくなる時期の来ることを認識した。当時彼は警官として働いていた。ところが、彼が教会に加入したことを知った依頼人たちは、

彼との契約を破棄してしまった。その中には、彼のいとこもいた。

ハービー・ピネガーの小屋は、幾度となく、宣教師たちの隠れ家となった。長老たちは、よく祖父を手伝って、窓や戸口に板を打ちつけたものであった。長老たちにタールを塗り、羽をつけると脅している暴徒たちから身を守るためである。

祖父が教会へ入ってから4年の後、当時まだ8歳の少年であった私の父が、彼の家族や他の2家族と共に、バプテスマ会の会場へと向かっていた。1899年12月3日のその薄ら寒い日、祖父は、自分の年若い娘と隣の家族の娘たちと共にバプテスマを施すことになっていた。一行がレイノルズミルの流れの近くまで来たとき、馬に乗った3人の男が近づいて来た。男たちが一行にどこへ行くのかと尋ねたので、祖父は、自分たちの意向を説明した。首謀者らしい男は、もしバプテスマ会を行なえば、仲間を大挙して引き連れてくると脅迫した。祖父は、彼らは何をしようとも、自分とその20人の一行は、使命を完全に果たすつもりである旨、通告した。そして祖父の一行は、レイノルズミルへと向かった。

レイノルズミルに到着すると、一行は、バプテスマのためにひっそりとした場所を捜し出した。川の上方の丘には、木や藪やつたがびっしりと茂っていた。8歳になったばかりの私の父ジョンは、穏やかな流れの中に突き出た砂州の上に伸びている、倒れかかった木の上に腰をおろした。この神聖な儀式の一部始終をしっかりと見るためである。祖父は、流れの中に入って行って、適当な深さの場所を見つけ、それから祈りをささげるために川岸まで戻って来た。静かな祈りの最中、ジョンは、大枝がポキリと折れる音が聞こえた。目を開けて、木の間をぬって丘の上を急いで見上げると、そこには、途中で一行を止めた例の男たちの姿があった。彼らは、先の脅迫を実行に移すために、仲間を引き連れてやって来たのだった。その中のひとり、山積にした岩のすぐそばにいて、今まさに、バプテスマ会を開こうとしていた人々の上に投げ落とそうとしているところだった。と突然、皆の視線が一点に集まった。暴徒の首謀者が飼っている大型の猟犬が、私の父のほんの鼻先のところまで走り寄って来たのである。年若いジョンは、居丈高にはえる猟犬を恐怖にかられて見つめていた。あの男たちと仲間は、何としてもバプテスマ会を開かせないつもりであった。しかし、祖父のピネガーは、雄々しく会を進めた。





レイノルズミルの事件があった頃のピネガー一家。向かって一番右に座っている男性がハービー・アンダーソン・ピネガー。向かって右に立っている女性がジョシー・ピネガー。右側に立っている少年がジョン・ピネガーである。

このモルモンの家族たちが、その脅迫にも恐れないのを見ると、暴徒の首謀者は、獵犬をけしかけて祖父のピネガーにかみつかせようとした。だがこのとき、驚くべきことが起こった。その犬が、低いうなり声を出して、怒った豚の背中のように毛を逆立てると、突然、歯をむき出して、飼い主の方へ向かって行ったのである。そしてのどを目標けてとびかかり、地面に倒してしまった。残りの暴徒たちは、犬が飼い主にとびかかったのを見て、恐ろしさのあまり逃げ出し、また首謀者当人も腰を抜かさんばかりで、やっとの思いで犬から逃れると、一目散に仲間を追いかけた。そして犬はなおもその足もとでほえながらついて行った。奇跡が起きたのだった。ピネガー一家の家族と、その隣人たちは、難局から救い出されたことを主に感謝した。その後、バプテスマ会は、何の妨害もなく続けられた。

その晩、その家族たちは、祖父の家に戻った。日が暮れて山小屋に闇が迫ると、迫害者たちはまた群れをなして襲って来て、私の祖父とモルモンの友人たちを脅そうとした。だが、彼らが門の所から祖父にののしりの言葉を浴びせると、祖父は彼らに、主イエス・キリストのみ名によって立ち去るよう命じた。すると暴徒たちは立ち去り、二度と戻ってはこなかった。

私たち家族は、この話を父や祖父から幾度となく聞かされた。そしてこの出来事は、何世代にもわたって、ピネガー一族の一人一人にとって、力の源となってきた。私は、祖父が主に忠実であったことに感謝の念を抱き、また私自身、義は必ず争いや敵対する者に打ち勝つということを確信できるようになった。

私の祖父や祖父と共にいた人々に、義しい原則に固く立つという勇気があったればこそ、主から助けを得ることが

できたのである。そして静かな、また安らかな強さが彼らの心に与えられ、勇気と確信とをもって、敵対者と堂々と渡り合うことができたのである。私自身これまで何度か、祖父の生涯のこの出来事を思い出して、悪に抗する強さを得たことがある。

私は、祖父の忠実さと信仰に心から感謝している。祖父の恐れを知らぬ勇気は、代々、主に対する信仰と愛として受け継がれるようになった。この祖父や、その他私の先祖たちが払ってくれた犠牲により、私が現在享受しているような、信教の自由やその他様々な自由という恵みを受けることも可能になったのである。私は、自分自身も主に忠実であることによって、私の祖父に忠実さを示したいと思っている。

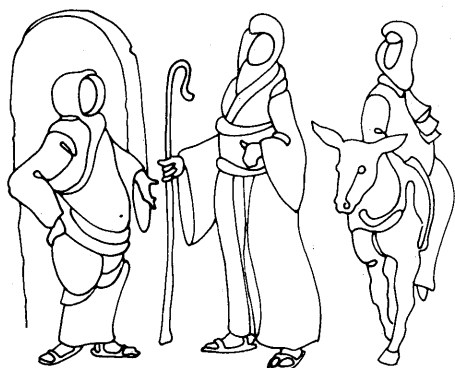
私たちが主に対して忠実であるということを証明する方法はいろいろある。両親に従順であること、兄弟姉妹たちを尊敬すること、教会の指導者たちに従うこと、教会の召しや神権の責任を完全に果たすこと、これらはみなそうである。また、忠実であるということは、国の法律や神の戒めに従順であるということでもある。勤め人は毎日正直に働くことによって忠実さを示し、雇用主は、正しく賃金を支払うことによって忠実さを示す。これも、主に対して忠実であることに関係がある。それは、私たちがお互いに行なうことは、主に対して行なうことだからである。仲間から悪いことをするようにそそのかされたときにも正しいものの側に固く立つことである。しかも、真理と義を守るために、ただひとりで立たなければならないこともある。

あなた方も、自分の家族の生涯を調べて、同じように天父に対して忠実であった例を捜し出してみるとよい。それは、あなた方の力と勇気の源泉となることだろう。

私たちが皆、私たちの忠実な先祖から受けた豊かな遺産に感謝することができるよう、そしてまた、私たちも真実の信仰を持って努力を重ね、主に対して忠実であることによりこれら気高い先祖たちにも忠実な者となることができるよう、心から祈っている。

宿屋騒動

ダイナ・ドナヒュー



一 何年というもの、中西部のある小さな町でクリスマス・ページェントの話が出ると、決まってだれかがウォレス・パーリングの名前を持ち出すのです。あの年の恒例の生誕劇でのウォレスの熱演は、今も語り草になっており、あの晩観客の中にいた古顔たちは、あの出来事を今もたびたび思い出しています。

その年、ウォレスは9歳で、本来なら4年生ですが2年に在籍していました。町の人でウォレスが同じ年齢の子について行くのがむずかしいことを知らない人はだれもいませんでした。彼は大柄で格好が悪く、動作はのろくて頭の回転もにぶかったのです。けれど彼はクラスの子供たちから好かれていました。みんな彼より小さい子ばかりです。でもウォレスから野球などに入れたと言われると、男の子たちは困った様子を隠しようがありませんでした。それだけは、勝敗が大事ですから。

そんなときはたいがい、彼を入れない方法を考え出すのですが、ウォレスはそれでもすねた風もなくうきうきして、後にくっついて行くのでした。ウォレスはいつでも人の役に立つ子で、にこにこ気持の良い自然児、逆に言えばお人好しでした。年上の男の子たちが小さい子たちを追い払うときに、「いたただめなの？ いたって邪魔じゃないよ」と言うのはいつもウォレスでした。

その年のクリスマス・ページェントで、ウォレスは笛を持った羊飼いになりたいとあこがれていましたが、舞台監督のランバード先生は彼にもっと重要な役を割り当てまし

た。あれこれ考えた末に、宿屋の主人ならせりふがそうないし、ウォレスの体格だとヨセフを断わるのに迫力が出るだろうという考えでした。

そういうことで、子供たちが杖やひげや冠や後光をつけてイエスの生誕劇を演じる町恒例のクリスマス・ページェントに、楽しみにしていた大勢の観客が集まりました。出演者と観客の中で、その夜の雰囲気になれよりもうっとりとなったのはウォレス・パーリングでした。後でみんなが言うことには、ウォレスは舞台のそでに立ち尽くし、食い入るように劇を見つめて、ときどきランバード先生が出番の合図はまだなのよと念を押すほどだったそうです。

やがて、ヨセフがゆっくりとマリヤをやさしく気づかいながら宿屋の玄関に姿を現わしました。ヨセフは背景幕の前に作りつけた木のドアをドンドンとノックしました。宿屋の主人に扮したウォレスがそこで待っていました。

「何だね？」ウォレスは乱暴なしぐさでドアをあけて言いました。

「宿を捜しているんです。」

「ほかを捜しな。」ウォレスはまっすぐ前を見て元気に言いました。「宿はいっぱいなんだ。」

「どこを捜してもだめだったのです。遠い所からきてとても疲れているんです。」

「ここにはあんた方の部屋はないよ。」ウォレスはいかめしそうに見えました。

「どうか、御主人、お願いします。これは妻のマリヤで、おなかに赤ちゃんがいるので、休む所が必要です。狭い所で結構です。マリヤはとても疲れています。」

ここでやっと、宿屋の主人は表情をゆるめて、マリヤを見下ろしました。そこで長い沈黙があって、観客をちょっとはらはらさせました。

「だめだ、ほかへ行きな！」と、舞台裏の人がささやきました。「だめだ。」

ウォレスは無表情にその言葉を繰り返しました。「ほかへ行きな！」

ヨセフは悲しげにマリヤに腕をまわし、マリヤは頭をヨセフの肩にもたせかけて、一緒に歩き出しました。でも、宿屋の主人は家の中に戻りませんでした。ウォレスは玄関口に立ったまま寂しそうなふたりを見つめていました。口をあいて、心配そうにまゆを寄せて、目には間違いなく涙が浮かんでいました。

このとき突然、そのクリスマス・ページェントは思いもよらない方向に発展したのです。

「行っちゃだめだ、ヨセフ」ウォレスは叫びました。「マリヤもおいで！」ウォレス・パーリングの顔は明るいほほえみになりました。「僕の部屋に泊まっていいよ。」

町のある人たちは、そのページェントが台無しになったと思いました。でもそう思わない人たちもいました。そう、それはそれは大勢の人たちが、そのクリスマス・ページェントは今まで見たうちで一番素晴らしいページェントだと思ったのです。

カミラ・アイリング・キンボール姉妹は、人を訪問して話をする家庭訪問教師の召しが大好きである。

「まだ少女だった頃、隣近所の人々がよく家へおしゃべりに来ていました」と彼女は語る。「キルティングをしたり、何か仕事をしたりしながら一日中いる人もいました。それが親しくなる機会になったりしましてね、今ではなつかしい思い出です。この頃は昔ほど行き来していないのではないかしら。ですから、家庭訪問がなおのこと楽しいんですよ」

キンボール姉妹は50年来、夫スペンサー・W・キンボール大管長の多忙なスケジュールの合間に家庭訪問の約束を組んできた。キンボール大管長がヨーロッパや南米、アジア、合衆国国内を旅行するからといって、姉妹が訪問教師の責任を受けなくてもよいとは考えていない。

「家庭訪問は教会の活動の中でも特に大切に価値があると思うんですよ。全世界の教会員を覆う傘のようなものだと思いますわ」

私はいろんな国で扶助協会の姉妹たちとたびたび話す機会をいただきました。その方々がワード部の会員のお宅に霊的なメッセージを携えて伺い姉妹と話し合い、何か必要なことがないかどうか様子を見てくる姿を拝見してきました。」

訪問教師が物的な援助を行なうことのできる地方が多いことを、キンボール姉妹は知っている。また、訪問した大部分の地域では物的欠乏を見なかったが、それでも情緒的霊的な助けは必ず必要はずだと彼女は語っている。「女性には、だれかに自分の気持ちを話したいことがときどきあるものです」とキンボール姉妹は言う。

「教会のあるところ、全世界でこの活動が行なわれてい

ると思うと、ひとつの家族のようですね。教会の姉妹たちの愛がじかに感じられます。

50年以上も家庭訪問をしてきて思うのですが、私にとって一番素晴らしい教会活動のひとつが家庭訪問です。本当に心からそう思います。」

家庭訪問の喜びのひとつは、同僚と親しくなれることだと彼女は言う。キンボール姉妹の現在の同僚はエルマ・フランセン姉妹である。

「お互いの関係を知り、お互いに感謝し合い親しくなることは、人生そのもののひとつの縮図です」とキンボール姉妹は語った。

また扶助協会に活発でない姉妹がいることは残念ですとも語る。「プログラムに参加できる人ならだれでもきっと、本当に満足できる活動だということがわかると思います。

大学の学位を取っても満足はあるでしょうけれど、学位だけが教育を受けた印ではないと思います。扶助協会では、女性がずっと勉強を続けられるのです」

ワード部で15年間も霊的生活の教師をしていたキンボール姉妹は、「女性がこの地上にいる目的を成就するのに一番役立っている組織は扶助協会だと思う」と語っている。

「女性に自分を表現する機会を与えてくれますもの。勉強だけでなく、己れを捧げることもできます。扶助協会で満たされない欲求はないと思いますし、与えられない援助もないと思うのです」

キンボール姉妹は、自分にとって家庭訪問は学習の場だと語る。「思うに、それがこの世にいる目的ではないでしょうか。

人は無知でいては救われません。特に福音と自分の責任とを知らなくては救われません。扶助協会は私たちの家族に対する責任と自分自身に対する責任をよく教えています。

良い妻、良い母、良い姑、良い祖母にどうしたらなれるかということが、扶助協会のすべての活動の目標ではないかしら。

それから、どうしたら良い伴侶になれるかもみんなが学ばなくてはならないことですね。それでもいつも変わって行くし、成長して行きます。教育が大切なのです。若い時代の必要はある領域に限られていますが、年を取るにつれて、私たちの必要はずいぶんと変化しますから」

キンボール姉妹は、良い訪問教師になるひとつの方法は立派な人になることだと語る。「私たちは隣人を自分自身のように愛さなければなりません。けれども、自分の価値を認めなければ、隣人に親切になれないでしょう。自分を愛していると同じだけ隣人が愛せるんです。年中自分に愛想をつかしている人には、それができませんから。

このことはとても大切だと思います。謙遜に自分の進歩に満足することと、自分本位なこととは違うということ。自分は最善を尽くしていない、もっとできるのにやっていないということを認識することは必要ですけど、きのうよりは少し前進することを毎日心がけなければいけませんね」

家庭訪問教師の召しを楽しむ キンボール姉妹

ゲリー・アバント

(「チャーチ・ニュース」記者)



家庭でも 教会付属図書館を 利用しましょう

「教会付属図書館とそこで働く人々の目的は、指導者、教師、家庭および個々の会員が福音を教えたり、学んだりするのを助けるために教材や器材、訓練された人を提供することである。」（「教会付属図書館手引き」p. 1）

1968年に教会付属図書館プログラムが発足した際、大管長会から、各集会所にひとつの教会付属図書館を設置し、その建物を使用するすべての組織がそれを活用するようにという指示が与えられました。

ここに述べられている「その建物を使用するすべての組織」には、そのワード部、支部に属するすべての家族と個人も含まれます。このことをよく理解していないユニットが多いようです。自分自身の福音の勉強とレッスンの準備に資料を必要としている教師ばかりでなく、福音の勉強をしたいと思っている人、また家庭の夕べをもっと内容のあるものにしたいと思っている家族の長も、教会付属図書館を利用することができます。

このように、教会付属図書館は教師だけのものではありません。そのワード部、支部の会員であればだれでも、福音の勉強と福音のレッスンのために、教会付属図書館を利用することができるのです。

参考資料や書籍の外に、絵やフィルムを使用すると、一層効果的なレッスンを行なうことができますでしょう。教会付属図書館には、両親が利用できるものが数多く備えられています。

以下のものが保管されています。

- ・ 絵、ポスター
- ・ 地図、表、グラフ
- ・ フランネルボード、資料
- ・ 雑誌や記事の切抜き
- ・ 手引き、テキスト
- ・ 映画、スライド、フィルムストリップ、オーバーヘッドプロジェクター、スクリーン、オーバーヘッドトランスペアレンシー、16ミリフィルムストリップ用カセットテープ、レコード

- ・ カセットテープレコーダー、オープンリールテープレコーダー、レコードプレーヤー、マイクロホン
- ・ 楽譜
- ・ 模型、複製物
- ・ 画架

このほかに、家庭関係や家庭貯蔵、時間の管理、系図の教え方、話し方に関する書物、伝記などを備えているところもあります。これらはすべて一定の期限付きで家族や個人に貸し出されます。

また、ほとんどの図書館にはペーパーカッターやアルコール式複写機のような器具が備えられています。しかしこれは借り出すことはできません。図書委員の助けを借りて、図書館内で使用します。地域によっては、マイクロフィルムやマイクロフィルムリーダーなど、系図関係の資料や器材も、図書館内で利用することができます。

上記の資料や器材がすべてどの教会付属図書館にも備えられているというわけではありません。それは、教会のそれぞれの地域で入手できる資料によって違ってきます。また家庭の夕べは、家庭によって取り上げる事柄が違ってきます。従って、各家庭は、図書館資料を利用する上で、想像力と独創性を生かし、最大の効果を上げるように求められています。利用する側の工夫次第で、どのような資料も生かして使うことができるわけです。

図書館の資料が利用できるのは、家庭の夕べだけではなくありません。ファイヤサイドやその他の特別集会でも活用することができます。ホームティーチャーであれば、特別なメッセージをテープに吹き込んだり、またフィルムストリップを利用して、担当の家族に伝えるのも時にはよいでしょう。七十人であれば、フィルムを使って伝道することができます。子供は福音についての絵本を借りるとよいでしょう。話の責任が与えられた場合には、教会付属図書館へ行って、それに関する資料を捜すこともできます。

神権組織や補助組織だけでなく、家族や個人への貸出しを担当する役員がいる教会付属図書館では、教材や器材も驚くほど多く整っていることでしょう。

ワード部、支部の教会付属図書館を利用してみたいと思っている人には、年度初めにすべての教会付属図書館で行なわれるオープンハウスが役に立つでしょう。オープンハウスを通して、会員は利用できる教材やサービスについて知り、器材の使用法を学ぶことができます。

教会付属図書館は、サービスの原則に基づくときに初めて正しく運営されます。教会付属図書館の主な目的は、神権組織や補助組織、またワード部、支部の会員に援助を提供することです。その一環として、教材、器材その他の保管と貸出しを行なっているわけです。

これらの教材、器材はあなたのためにあります。家庭での福音の教え方を改善したいと思っている両親の皆様、教会付属図書館はきっと皆様のお役に立てると思います。

四福音書の対観表 (「聖徒の道」 9月号より続く)

第5の時期：

後期のユダヤにおける伝道

(「四福音書」第26－28課)

出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
仮庵の祭で教えを説く	エルサレム				7：11－53
姦淫を犯した女、イエスのもとへ連れて来られる	エルサレム				8：1－11
世の光となり一つとなることの説教	エルサレム				8：12－30
ユダヤ人に彼らの罪について説く	エルサレム				8：31－59
七十人、帰る ¹	ユダヤ			10：17－24	
二つの大切な戒め——良きサマリヤ人のたとえ話	ユダヤ			10：25－37	
マリヤとマルタのもとを訪れる	ベタニヤ			10：38－42	
弟子たちに祈りについて教える	ユダヤ			11：1－13	
おしの悪霊、叱責され追い出される				11：14－36	
清めについて説く				11：37－54	
群衆に教えを説く——愚かな金持のたとえ話	ユダヤ			12：1－59	
ガリラヤ人の殺りく——いちじくの本のたとえ話	ユダヤ			13：1－9	
生まれつきの盲人を癒す ²	エルサレム				9：1－41
良い羊飼いのたとえ話	エルサレム				10：1－21
宮清めの祭——イエス、メシヤであることを宣言する	エルサレム				10：22－39

1. タルメージ長老はもっと後期の出来事としているが、正確な時期はわからない。(「基督イエス」p. 494)

2. タルメージ長老はもっと早い時期の出来事としている。(「基督イエス」p. 477、脚注36)

第6の時期：

ペレアの時期

(「四福音書」第29－31課)

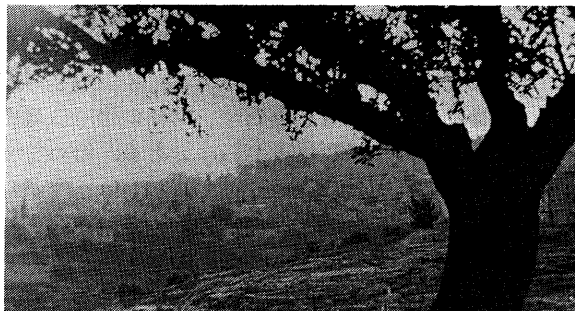
出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
ヨルダンの向こう岸へ行く	ペレア				10：39－42
安息日に女をいやす ¹	ペレア			13：10－17	
からし種の譬 ¹	ペレア			13：18－21	
エルサレムへ向かう ¹	ペレア			13：22－30	
ヘロデ・アンティパスについての忠告 ¹	ペレア			13：31－35	
ラザロの病気の知らせ ¹	ペレア				11：1－16
水甕をわずらっている者、安息日にいやされる	ペレア			14：1－24	
犠牲について説く ¹	ペレア			14：25－35	
譬： ¹	ペレア			15：1－2	
いなくなった羊				15：3－7	
なくした銀貨				15：8－10	
放蕩息子				15：11－32	
不正な家令				16：1－13	

注：イエスは宮清めの祭のときに捕えられそうになったので、ヨルダンの向こう岸すなわちペレアの地に退かれた。そしてここで約3ヵ月間教えを説き、大勢の人々を導かれた。この地方は、バプテスマのヨハネが以前その業を開始した所である。

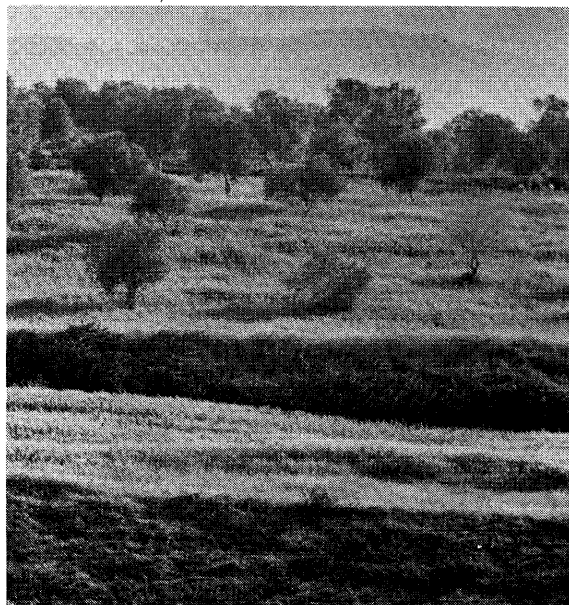
出来事	場所	マタイ	マルコ	ルカ	ヨハネ
欲について説く ¹	ベレア			16:14-18	
金持とラザロの譬 ¹	ベレア			16:19-31	
罪と信仰について説く ¹	ベレア			17:1-10	
ラザロ、よみがえる	ベタニヤ				11:17-46
イエスに対する陰謀	エルサレム				11:47-53
エフライムの町へ向かう	エフライム				11:54
旅の途中、10人のらい病人をいやす ¹	サマリヤ			7:11-19	
神の国について説く	ガリラヤ			17:20-37	
譬： しつこくせがむやもめ ²	ガリラヤ			18:1-8	
パリサイ人と取税人				18:9-14	
ヨルダンを越えてベレアに行く ¹		9:1-2	10:1		
パリサイ人、イエスを試みる ¹	ベレア	19:3-12	10:2-12		
幼な子たちを祝福する ¹	ベレア	19:13-15	10:13-16	18:15-17	
金持の青年、永遠の生命について問う ¹	ベレア	19:16-30	10:17-31	18:18-30	
ぶどう園の労働者の譬	ベレア	20:1-16			
十二使徒の先に立ってエルサレムへ向かう	ベレア	20:17-19	10:32-34	18:31-34	
ヨハネとヤコブの望み	ベレア	20:20-28	10:35-45		
盲人バルテマイ、いやされる（エリコの付近で）		20:29-34	10:46-52	18:35-43	
取税人ザアカイの家に泊まる	エリコ			19:1-10	
ミナの譬	エリコ			19:11-27	
エルサレムへ向かう				19:28	
多くの人々、イエスを捜す	エルサレム				11:55-57

1. タルメージ長老はこれらの出来事をその著書「基督イエス」(pp. 511-552)で取り上げているが、記述の順位よりも後期に起こったものと考えている。(p. 563)

2. タルメージ長老は、主の教えを説明する都合上、このたとえを他のたとえと共に論じている（「基督イエス」 pp. 503-504）が、時期的にはこの時期のことであるとしている。



ベタニヤ——マリヤとマルタの住んでいた村



ナザレ——イエスの故郷

七十人第一定員会

七十人第一定員会の設立は、教会中央レベルでの神権管理にとってひとつの偉大な道標となるものであるが、スペンサー・W・キンボール大管長は、それについて次のように語っている。「啓示の中で述べられている3つの管理定員会は、現在教会に課せられている多岐にわたる任務を効果的に処理し、み業の急速な進展への対応を可能にする。そしてひいては、主が再びこの地上を訪れ、主の教会と王国を直接管理される日に向かって備えをなすものとなるであろう。

先の半期総大会で行なわれた改組は、教会の中央レベルでの管理運営について、その必要事項をすべて充足するものとなる。それは、啓示により明らかにされているように、必要に応じて定員会会員の数を大幅に増やすことができるからである。1835年に予言者ジョセフ・スミスに与えられた教義と聖約第107章の啓示が、この大会での改組に関する多くの疑問に対して解答を与えてくれる。

定員会の権能についてはこう書かれている。「また、福音を説き異邦人と全世界の人々に対する特別の証人たらんがため『七十人』召さる。すなわちかくの如くこの者たちの天職に就ける義務は、教会に於ける他の職員らの義務と異なるなり。

またこの『七十人』は、今挙げたる十二人の特別な証人、すなわち十二使徒と等しき権能を有する定員会を構成す。

而して、以上の何れの定員会の為す決議も、ことごとくその一致の挙手によって為されざるべからず。すなわちこれら定員会の全会員はその決議をして互いに等しき効力、または有効性あらしめんがため、一人一人皆その決議に賛同せざるべからず。

已むを得ざる事情ある時には、定員会は大多数の出席を以て構成するを得。」(107:25-28)

責任についてはこうある。「『七十人』は十二使徒会すなわち巡回高等評議員会の指揮の下に教会を設立し、またよろずの国民に於け

る教会のあらゆる事務を整理するに主の御名によりて行い、まず異邦人より始めて次にユダヤ人に及ぼすべき者たちなり。」(34)

さらに、教会の規模の拡大に伴う定員会会員の増加についてはこう述べられている。「また、『七十人』の数の中より選ばれたる七人の長ありてかれらを統轄すべきことは、『七十人』の神権を示せる示現による。

この中、第七の長は他の六人の長を統轄すべきものなり。

この七人の長たちは、彼らの属する第一の『七十人』の他に各『七十人』を選び、これを統轄すべきなり。

然る後葡萄園に於ける働き必要ならば、また他の『七十人』を選ぶこと七十の七倍に達すべし。

これらの『七十人』は、異邦人より始めて順次にユダヤ人に至る巡回福音伝道者たるべし。」(93-97)

この第三の管理定員会の設立は、教会の規模の拡大を如実に示す画期的な出来事である。教会は、暫定的な役職であった十二使徒評議員会補助の制度を廃止し、初期の啓示に基づく本来の組織に返ったわけである。初めて十二使徒評議員会補助が召されたのは、今から35年前の1941年で、以来38名の補助が召されている。最初に召された補助で、現在も教会幹部として残っているのは、マリオン・G・ロムニー副管長と七十人第一定員会会員のアルマ・ソニ長老の2名だけである。これら38名の補助の中からは、5名が副管長に、10名が十二使徒評議員会会員に召された。

また七十人第一定員会は管理定員会としては新しいが、定員会を構成する会員の経歴は多岐にわたり、教会幹部としての奉仕期間も長い。ちなみに第一定員会会員の教会幹部としての奉仕期間を総計すると305年、定員会会長会（七十人最高評議員会は今後、七十人第一定員会会長会と呼ばれる）だけでも77年にも及ぶ。このように、七十人第一定員会は経験豊富な人々の集まりと言えよう。

「私がまた眺めると、大きな都のエルサレムを始めそのほかの都市が見えナザレの町もまた見えた。そして私はナザレの町の中に一人の処女を見たが、それはまことに色が白く美しい処女であった。

この時私は天の開くのを見たが、一人の天使が天降ってきて私の前に立ち『ニーファイよ、汝は何が見えるか』と仰せになったから私は、一人の処女が私に見える、それはどんな処女にも勝って美しくまた麗しい処女であると言った。

すると天使は『見よ、今汝が見る処女は肉体に宿りたもう神の子の母である』と教えて下さった。

私はそれからその処女が『みたま』につれて行かれるのを見た。その処女が『みたま』につれて行かれてからしばらくして天使が私に『見よ』と仰せになったから、私が眺めると、その処女がまた見えてこのたびは一人の幼児を抱いていた。

（I ニーファイ 11：13-15、18-20）